

~~画像の転載、使用、加工を禁じます~~

1994年

## 序文

本報告書は、1993年度に実施いたしました山梨県立看護短期大学の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

本遺跡の所在する甲府市池田一丁目付近は金峰山を水源とする河川である荒川の右岸にあって扇状地上に位置しております。この付近は現在、水田ならびに畠地として利用されているほか、近年の住宅開発により、住宅地・商業地としても大いに土地利用がなされているところであります。周辺地域は山梨県内でも遺跡が数多く存在する地域として著名であり、特に本遺跡から荒川を挟んだ対岸の湯村・千塚地域には古墳時代に中心を置く集落遺跡、あるいは後期古墳が散在しております。このような地域で実施されました本遺跡の調査では、水田跡の調査というこの地域では初めての成果をあげることができました。当初は周辺地域の歴史的環境に、古墳時代までさかのぼる水田跡も検出されるのではないかと期待されましたが、それには及ませんでした。しかしながら、近世までの水田跡の変遷を少なくとも計3面まで辿ることができたことは、本地域の歴史を考える上で非常に有益なことであり、ひいては山梨県の水田跡の研究上でも同様であります。

調査の詳細については本報告書のとおりであります。今後の水田跡研究ならびに地域史研究のため本報告書が多くの方々に活用していただければ、これに勝る幸いはございません。

最後となりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまでご協力を賜った関係者各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚 初重

## 例言

1. 本書は、山梨県甲府市池田1丁目6-1番地に所在する東河原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、山梨県立看護短期大学の建設に伴うものであり、山梨県教育委員会が県厚生部の委託を受け実施したものである。
3. 発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センターが担当した。
4. 本書の執筆および編集は森原明廣・宮里学が行なった。
5. 遺構・遺物の写真撮影は森原・宮里が行なった。
6. 本遺跡の資料（図面・写真・遺物等）はすべて山梨県埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 発掘調査・整理調査を通じて、下記の方々・機関よりご協力・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げる。  
甲府市教育委員会・甲府市池田一丁目地区的皆様・山梨県立高等看護学院・日本赤十字社甲府支部・同 望月和文  
山梨県立中央病院池田住宅の皆様・碓井透・(株)パレオ・ラボ(順不同、敬称略)
8. 表紙・本文中の古図は所蔵者桜井健太郎氏と出典『農業図絵』刊行元の社団法人農山漁村文化協会の好意により掲載したものである。
9. 本遺跡の調査組織は下記のとおりである。

- 調査主体 山梨県教育委員会  
調査担当 山梨県埋蔵文化財センター 調査研究課 文化財主事 森原明廣 文化財主事 宮里 学  
発掘調査 青柳清・秋山みづゑ・芦沢留一・芦沢よし子・兩宮利光・池田武子・石井間造・石川弘美・石原沙織  
市川祥子・一瀬正樹・井上文一・上田駒夫・大森朝一・大森ゆきえ・岡仲子・荻原光代・加賀美宏  
櫻本志郎・加藤智恵子・金子浩美・兼子よし子・北原和江・小林寛明・込山美恵子・坂本逸郎・佐藤優子  
志茂博・鈴木恵理子・間口愛子・武田きく江・立川なつじ・中込かつ子・長坂清・西脇誠・花曲敬子  
10. 整理作業 市川祥子・中川美千子・森田良子

(五十音順、敬称略)



## 第1章 調査の経緯と方法

### 第1節 調査経緯

山梨県厚生部では、新規に山梨県立看護短期大学を開校することとなり、現在開校している県立看護学院の敷地内を建設地として選定した。これにより、県教育委員会は県厚生部と協議の上、平成5年4月に建設予定地内の埋蔵文化財試掘調査を実施し、建設予定地の一部で埋蔵文化財の存在を確認した。この試掘調査結果を受けて、県厚生部・県教育委員会・県埋蔵文化財センターの3者は具体的な発掘調査に向けての協議を行ない発掘調査を実施することになった。発掘調査は同年5月27日より同年9月2日まで約3ヶ月を要した。整理作業については発掘調査終了後から同年12月末まで県埋蔵文化財センター内で行なった。以下、調査事務手続きについて記述しておく。

平成5年 5月	文化庁長官宛てに発掘通知を提出
同 年 5月27日	発掘調査を開始
同 年 9月16日	甲府警察署長宛てに埋蔵文化財発見届を提出
平成5年 3月末日	発掘調査報告書を刊行

### 第2節 調査方法

試掘調査は、建設予定範囲に重機と人力による試掘坑を計10ヶ所に設定した。延べ3日間にわたる試掘調査の結果、建設予定地内の東側半分以上は表土層下に建設廃材が地表下2.5mまで廃棄されており、また人頭大以上の蝶と砂質土からなる荒川の堆積物により、埋蔵文化財の存在を確認することはできなかった。西側部分については試掘坑の断面より遺物及び珪片と床土が3面にわたり確認され、調査対象範囲とした。

調査対象範囲は、建設設計図面を対比しつつ設定し、この結果対象面積は950m<sup>2</sup>となった。また、調査区は植栽の都合上南北に分けることを余儀なくされ、北側をA区、南側をB区と呼称することにした。

本調査に至っては、駐車場と前庭となっているアスファルト舗装面と表土を重機により取り除いた後、人力による遺構確認作業を行なった。また、調査にあたり検出された遺構、出土した遺物の位置を記録するため調査区全体に4m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定では北から南に向ての東西ラインに1からはじまる算用数字を、西から東に向ての南北ラインにAからはじまるアルファベットを振り、各グリッドの名称を定めた。グリッド設定はアルファベットのラインが磁北に沿うよう、任意の基準点を設けたのち調査範囲全面に派生させた。

検出した遺構は、グリッドを基準とした平板による平面図作成及び海拔数値の記録、断面図の作成、写真撮影を行なう工程で調査を行った。遺物についても同様に、各個に通し番号を振り、出土位置及び海拔数値を記録し取り上げた。

なお、遺物の取り上げは光波測量器を用い、出土した遺物全てを対象に記録作業を行なったが、データの処理過程においてトラブルが発生したため、詳細なデータの提示は不可能となった。

## 第2章 環境

### 第1節 自然的環境

水源を秩父山地にもち国指定特別名勝御岳昇仙峠を南下、甲府盆地に入り市街地を貫流し笛吹川に合流する荒川の右岸扇状地に調査地点は存在する。付近の標高は280m前後を測る。

調査地点一帯は、秩父山地に連なる金峰山・帝那山の15°~30°の南傾斜山地斜面の先端より1.5km程のところにある。荒川の盆地進入部付近は、秩父山地斜面と茅ヶ岳を源給とし敷島町・韮崎市の北東部斜面を形成する15°~30°の火山傾斜との接線である。また、甲府市山宮町・羽黒町を起点とし北から南へ3°~4°で傾斜する荒川扇状地がはじまる。

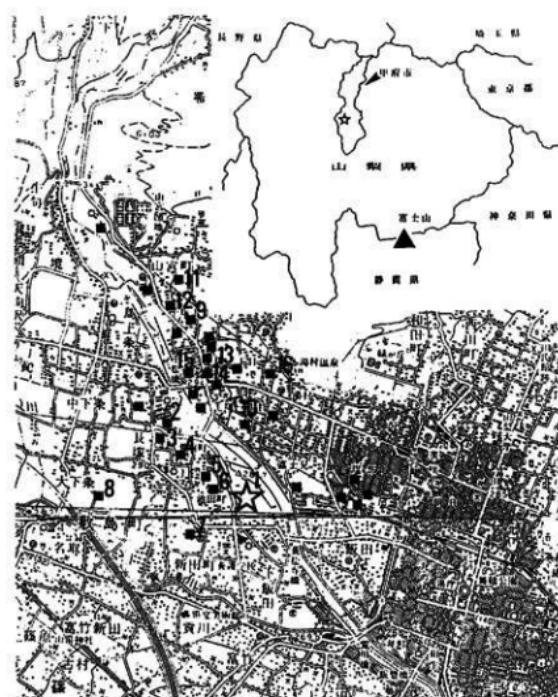
かつての荒川は、東西に振るいくつかの旧流路を形成したことが地形的に窺え、やがて現在の位置にその流路を定着させる。竜王町竜谷(赤坂台)を東限にもつ茅ヶ岳火山斜面の傾斜は、荒川の西を流れる賀川を境に終わり、荒川扇状地へと接続している。従って、本調査地点一帯は荒川によって形成された扇状地上に立地し、砂礫・中砂で構成される土壤堆積であり、このことは今回の調査でも確認されているところもある。

調査地点周辺の現在の土地利用状況をみてみると、以前より低地という水利の良さから水田耕作が盛んであったが、現在は河川工事も完成し、遊歩道など緑地化され緑の多い住宅地・商業地となっている。賀川以西は荒川周辺より1段高い地形で宅地化も進んでいるが、かつては桑栽培を主体とし、本遺跡も位置する1段低い地形では、主に水田の造成が多く見られる。

遺跡周辺と荒川の関係は、平常時と荒川の氾濫あるいは流路移動の際に被さった砂礫層・砂層が変則的だが交互に堆積する状況が窺える。この全体層のなかに水田面とこれを覆う砂礫層でサイクルをなす堆積状況が遺構面がA・B区各3面の中で確認されている。従って、少なくとも3回以上にわたり水田の造成→耕作→埋没という同様な現象が繰り返されている事が調査で判明した。

この様に、付近一帯は水害という自然の影響を強く受ける難所である反面、造成した水田が災害により砂で覆われてしまう事態に見舞われてもすぐに新たな水田を造成するという生活者の積極的な活動の一端が現れていることが窺える。

## 第2節 周辺の歴史と池田一丁目の小字名



- 1 東河原遺跡
- 2 穴塚古墳（市指定史跡）
- 3 西河原遺跡（縄文・平安）
- 4 平石遺跡（平安）
- 5 居村・村上遺跡（平安）
- 6 前田遺跡（平安）
- 7 豆田遺跡
- 8 金の尾遺跡（弥生・古墳）
- 9 櫻田遺跡（古墳）
- 10 音羽遺跡（古墳）
- 11 夫婦塚古墳
- 12 天神塚古墳
- 13 猪塚古墳
- 14 鳥塚古墳
- 15 蛇塚古墳
- 16 加牟那塚古墳（県指定史跡）

第1図 調査地点周辺の埋蔵文化財分布図（縮尺1/50000）

現在までに確認されている調査地点周辺の埋蔵文化財包蔵地は第1図のとおりである。件数としては密集地という様相ではない。時期的には、県指定の加牟那塚古墳をはじめ古墳時代に属する集落跡と古墳が10ヶ所以上あり、次いで平安時代・弥生時代となり、縄文時代の遺跡は極めて少ない。これらを地形的に見ると、調査地点の上流部である千塚周辺の山地では古墳が集中し、集落跡は麓から展開し時代が新しくなるに連れて盆地低地部へと広がる傾向がみられる。

本調査地点の対岸、北1.2kmの荒川左岸に位置する千塚市街地については、現在宅地化がかなり進み、かつての景観を想像させないが、県指定史跡で大型横穴式石室をもつ加牟那塚古墳をはじめ天神塚・猪塚・鼠塚・蛇塚などの後期古墳群が建造されている。『甲斐国誌』の記述にも「無明ノ古塚多シ破壊シテ今分明ナラズ蓋村名起所ナリ」とあり、そのかつての古墳分布状況を記述している。また、万寿森古墳に代表される湯村一帯を含めて、県下でも有数の後期古墳密集地であり地名の由来ともなっている。さらに、後期古墳密集地の周辺には音羽遺跡・櫻田遺跡などの集落遺跡が確認され、この荒川左岸に生活の基盤を築いたことを窺わせる。

一方、荒川を挟んで右岸の本遺跡が位置する池田町一帯は、甲府市指定史跡の穴塚古墳以外は古墳時代に属すものは確認されておらず、本遺跡の西側一帯は、弥生から奈良・平安時代の金の尾遺跡を代表に西河原遺跡・平石遺跡など平安時代に

残す遺跡が若干存在し、埋蔵文化財の分布という観点からみれば千塚一帯とは様相を異にする。しかし、地形的条件である低地を利用して古くから水田が造成されてきたこところであり、本遺跡の存在もこれを裏づける資料となろう。

さて、今回調査した遺跡の名称は、現在ではあまり一般的に使用されていない古い時代の小字名をとて東河原遺跡と呼称することにした。

池田町周辺の小字名のなかには、川原(河原)・田という文字を使った地名が多い。慶長検地・貞享検地には前川原・下川原・中川原・北川原・石原田・二反田・中田・榎田・茶田等がみられる。現在は、町名制に変わりあまり聞くことはないが、かつてはこの様に川や田を基準に方位や位置、特徴を加えて各土地を呼称していた。

今回、遺跡の名前になった東河原という小字名の由来について考えてみると、すぐ脇を流れる荒川を基準として、その東側に広がる河原敷きを指していると想像できる。しかし、第1図を見ても分かるように実際にには東河原は荒川の西(右岸)に存在する。

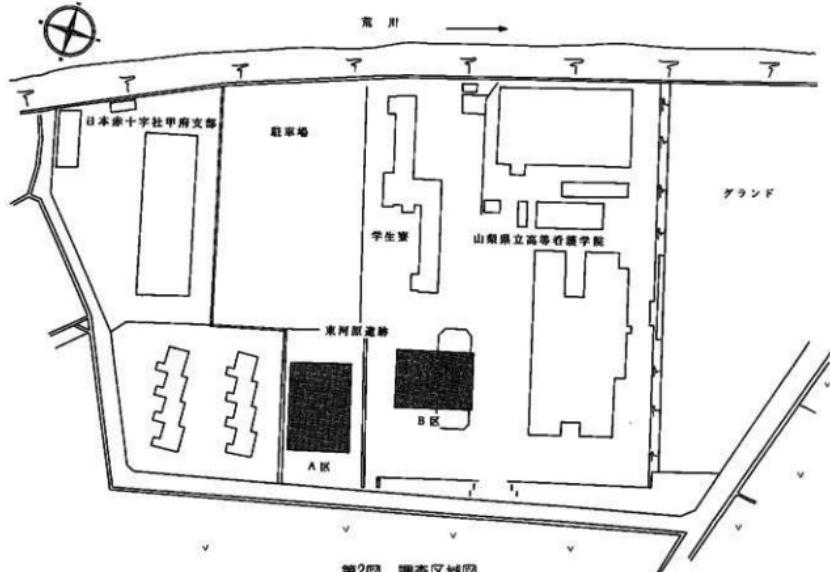
したがって、これはかつて、荒川の流路がどこに存在していたのか明確に捉えることはできないし、どこを基準にして東なのか分からぬが、築堤技術の導入を迎えるまで幾度もなく氾濫し、その流路を変えたことが窺える。おそらく、東河原という小字名がついた時代には荒川は今よりも西を流れているとも考えられる。

また東河原に隣接して、赤渕という小字名が遺跡の南にある。調査中、覆土を掘ると酸化して赤色化した土壤が数面の平面上で確認された。これは、一帯の土壤に鉄分が多く含有されていることに起因するが、この土壤の特徴が赤渕という地名の直接の由来に大きく関わっていると考えられる。一方、地元の言い伝えによる赤渕という名の由来は、永正十七年(1560)武田信虎の時代まで遡る。

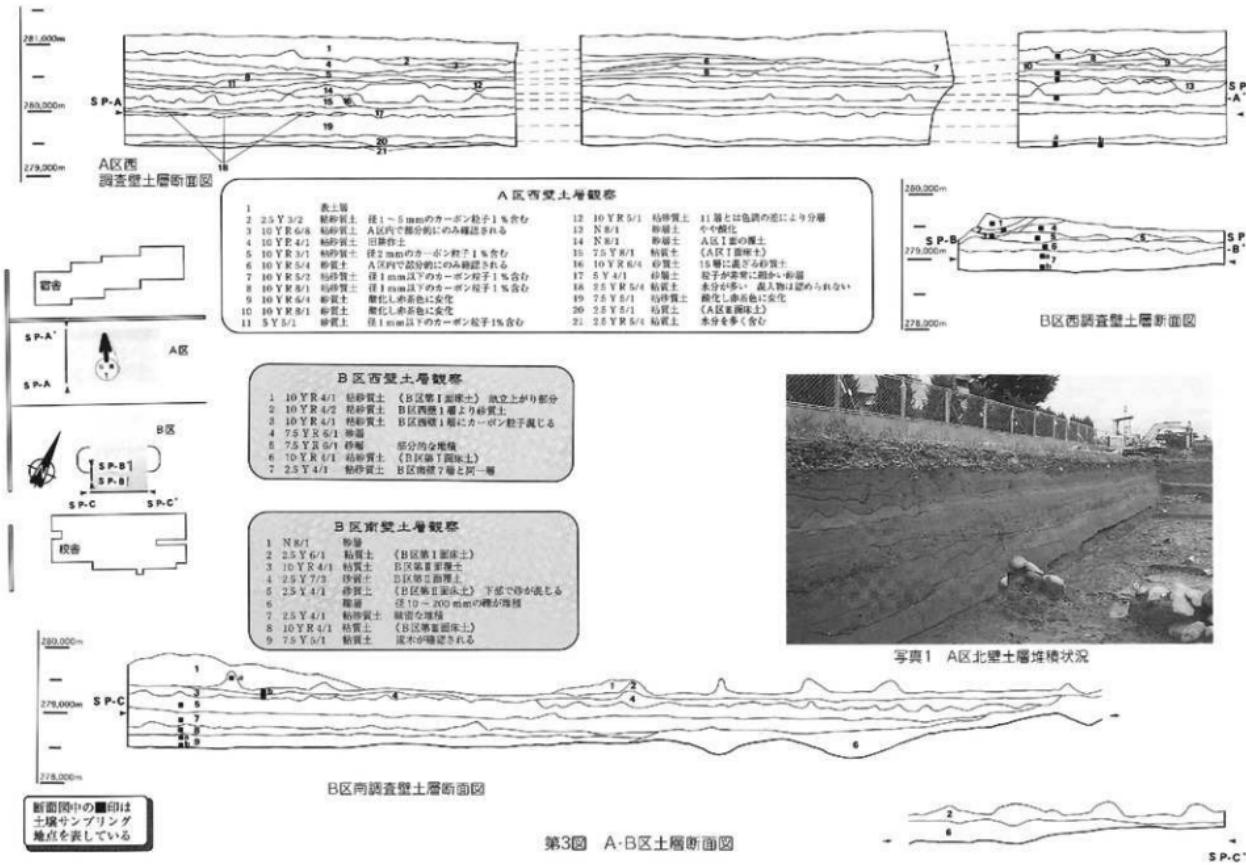
この年一万五千の兵力を引き連れて遠江土方城主福島正成が甲斐国に進攻してきた。これを迎え撃つ武田信虎はたった二千の兵力であった。両軍は飯田河原で衝突し、数日にわたる激戦の末、ついに武田方は勝利した。これを飯田河原の合戦と呼んでいるが、この戦いの際に多くの戦死者と村民に被害がでて、飯田河原の地は血の海になったのが赤渕の由来といわれている。

さて、このように一帯は、特に古墳時代以降から土地の利用が活発に行なわれるようになり、今回の調査で明らかになった水田の造成の時期が同様に古墳時代まで遡るとは多角的にみて考えることはできない。しかし、少なくとも小字名からも読み取れる水の利という外的要因のもとこの地を選択し、古墳時代以降組織的に経済的・社会的基盤を構築したことは周辺の歴史的・地理的環境を見てみると当然の事と考えられる。

### 第3章 調査された遺構と遺物



第2図 調査区域図



本遺跡の基本土層は6頁に詳述しているので概要のみを述べる。

調査範囲の土層の堆積状況は地形的にも判断できるように、荒川の影響を非常に強く受けている。土壤的には、現地表面下に若干の腐食土が確認できるほか、これ以外は砂質またはシルト質の土壤で構成されている。A・B区で水田面が各3面確認されたが、床土はシルト質または細粒の砂質の土壤で、各面の覆土は砂質であることが多い。

つまり、水田構築時の床土と荒川の氾濫あるいは流路移動の際に被さった砂層が交互に堆積している。床土→覆土→中間層でひとつのサイクルとなり、少なくとも3回以上にわたり同様な現象が繰り返されている事が調査で判明した。

堆積状況としては土層観察を行った結果、A・B区で安定した堆積層が多く認められた。堆積厚は不均一であるが水平堆積であることが多く、調査区内で部分的にのみ観察される砂質層も多い。

また、基本的には同一土層だが、酸化の程度やこれによる色調の変化も激しい。従って、十数メートル程度の距離のA・B区の各土層の対比を行なうのは困難であり、自然科学分析結果に依存するところが大きい。

## 第2節 A・B区の調査

A・B区各面の記載項目は、検出状況、水田の形状、水田の使用時期、出土遺物、遺構の状況、自然科学分析結果の6項目を設定した。

本文記載の各遺構面の捉え方として、A・B各面とも水稻・陸稻を問わず水田耕作であるという立場に立ち「水田面」という表現を用いて記載した。但し、小畠群など見解によって水田耕作という範囲のなかに収まらないものについては耕作面という表現をしている。更に、同一面内に畦畔による複数の区画が存在するときの名称として、方位（東西南北）を用いて区画を表現した。

水田の形状に記載してある区画面積の表示については、1/100に縮小した図面をもとにエリアラインメータTAMAYA PLANIX5000（タマヤ計測システム）を使用し測定したものである。測定方法は、ストリームモードによる同一区画の測定を調査区壁面の下端ラインを測点として3~4回繰り返し行い、その平均値を提示した。

自然科学分析結果には、特にプラント・オバール分析結果について記載した。また、稻作の可能性を示す検証例では試料1gあたりのプラント・オバール検出数は5,000個としているので、これを基準とした。

### 1) A区第1面 (遺構関係 遺構図:第4図・全体写真:写真2・部分写真8~9・遺物関係 実測図:第11図・写真:写真23・観察表:1)

#### ●検出状況

第14層を掘り下げて遺構確認の作業中、東西方向に延びる歯の頂部を平面的に數本確認。第14層は第I面の覆土と判断し、A区全体での検出作業を進行させた。

#### ●水田の形状

検出された水田面としては1区画と判断する。区画面積は387.9m<sup>2</sup>。

#### ●水田の使用時期

近世以降。

#### ●出土遺物

出土遺物は21点である。出土遺物は摩滅が認められ、調査区域外からの流れ込みと推測されるものがある。従って、遺物を水田の使用時期決定の判断材料とすることはできない。詳細については第3章4節に記載してある。

#### ●遺構の状況

歯の遺存度は、部分的には消失しているが良好である。

歯の規模については幅25cm、高さ10cm、間隔は80cm（ともに平均値）で合計19本が存在する。歯の配列は、等間隔ではほぼ平行という規則性があり、主軸はN=95°-E方向に直線的に延びている。床土のレヴェルは平均で280.10m~280.20m、地形的には若干だが北から南方向に傾斜している。

全体的には単調な歯の配列であるが、B-5グリッド杭付附近に2カ所、歯が部分的に平面的広がりをみせる箇所がある。それぞれは隣り合わせであるが、孤立しており連續性は認められない。この平坦部のレヴェルは歯の頂部とはほぼ同一レヴェルである。また、中心部やや東寄りのところでブリッジ状に歯と歯が連結する部分が認められる。やはり歯の頂部とはほぼ同一レヴェルであるが、両者が水田造成の段階でできたものなのか、あるいは耕作時における機能を果たすため作られたのかは推測できない。

調査区東部に歯の頂部とはほぼ同一レヴェルで広がる平坦地が検出されている。この平坦地には、歯および他の遺構が確認されていないため、この部分の利用方法については不明である。しかし、この平坦部の存在から、A区第I面は水田面としての東端が現れているものと判断することができる。遺構としては歯以外は検出されていない。

## ●自然科学分析結果

プラント・オパール分析の結果、第Ⅰ面床土(A区第15層)からは12,300個(試料1g当たり)が検出され、上位層では更に多く50,600個(試料1g当たり)が検出された。検査例に従うと、A区第Ⅰ面は耕作が行なわれていた可能性が高い。

## 2) A区第2面 (遺構関係 遺構図:第4図・全体写真:写真3・部分写真10~11/遺物関係 実測図:第11~12図・写真:写真23・観察表:表1~2)

### ●検出状況

第Ⅰ面調査中にすでに第Ⅱ面歯の頂部が部分的に検出されたため、第Ⅱ面の存在を確定した。

### ●水田の形状

歯の形状や規模がA区第Ⅰ面と極めて類似する形である。耕作面としては、1区画と判断する。区画面積は299.1m<sup>2</sup>。

### ●水田の使用時期

近世以降。歯の形状や規模などがA区第Ⅰ面に類似していることからA区第Ⅰ面とⅡ面には大きな時間差はないと推測できる。

### ●出土遺物

出土遺物は26点である。詳細については、第3章4節に記載してあるが、他の面と同様に遺物の年代から水田使用時期を決定することはできない。

### ●遺構の状況

歯の遺存度は良好である。

歯の規模については幅25cm、高さ10cm、歯の間隔は80cm(ともに平均値)で、合計21本を数える。歯は、等間隔ではなく平行な配列であり、主軸N-105°-E方向に直線的に延び、規則性のある配列である。

北から17本目の歯を境に南側は若干様相を異なる。17本目以北は歯の形状や規模がほぼ同一で、床土のレヴェルも平均27.9mと変化なく、面的傾斜は認められない。これに対し、17本目以南は、歯の形状がやや幅広で高くなり、歯の間隔も狭くなる。5~10cm程度であるがレヴェルも若干低くなる。この部分の歯は、他に比べて長さが短いことが特徴として挙げられる。なお、面的傾斜は認められない。この北から17本目の歯が、第Ⅱ面における変化点となっているが、その起因や耕作時の機能については不明である。

一区画の面積については、水田の範囲を完全に把握できなかったので算出できない。但し、調査区西側に歯頂部と同一レヴェルで広がる平坦部が存在しており、この部分の土地利用方法については、他の遺構が確認されていないことから不明だが、第Ⅱ面水田の一区画の西端が現れているものと判断できる。

第Ⅱ面の終焉については、覆土が完全な砂礫層であるから、自然災害(荒川の氾濫などを想定)により消滅したと考えられる。その後直ちに再構築され、ここにA区第Ⅰ面との連続的相關性が発生すると考えられる。A区第Ⅰ面の歯を軸として比較すると、第Ⅱ面の歯は東に約10°傾くほか、規模・形状・配列に類似性をみることができる。

### ●自然科学分析結果

サンプリングに伴い第Ⅱ面を層位的に把握できなかったため分析は行なっていない。

## 3) A区第3面 (遺構関係 遺構図:第4図・全体写真:写真4・部分写真12~14/遺物関係 実測図:第12図・写真:写真23・観察表:表2)

### ●検出状況

上層の第Ⅱ面西側平坦部の下30cm程のところで、A区Ⅰ・Ⅱ面より規模が狭く、小さく限定された範囲での耕作を推測させる小歯群の痕跡が確認された。更に、一段低くなる調査区南側では東西と南北の畦畔を確認し、A区第Ⅲ面の存在を確定した。

### ●水田の形状

大きく上段と下段の2つで構成される。上段とは、調査区西で確認された小歯群跡で面積は30.7m<sup>2</sup>を測る。下段については水田面と判断できる。下段は東西の畦畔で南北に2区画されるので、南区画の面積は56.3m<sup>2</sup>、北区画面積は201.3m<sup>2</sup>である。上段と下段は、約60cmの段差をもって区分されている。

### ●水田の使用時期

近世以降。構築時期やA区第Ⅱ面との時間差については不明である。

### ●出土遺物

出土遺物は合計185点である。詳細については、第3章4節に記載してあるが、他の面と同様に遺物の年代から水田使用時期を決定することはできない。

### ●遺構の状況

調査区西側の一段高い平坦面に構築された小歯群の規模は、幅15cm、高さ5cm(ともに平均値)で、長さ140cm前後、歯の間隔

20cm前後で配列されている。特徴として、遺構の中央部分やや北寄りの畝に長さ220cm(最大値)をもち、南に行くほど畝は縮小し、やがて消滅する。これに併走する溝は途中分岐して2条になり、幅約20~40cm、高低差約4~10cmのものである。

また、一段低い水田とのレヴェル差は60cmで、南北に走る段差斜面(法)で区分され、段差下では部分的だが併走する溝状遺構も確認されている。段差斜面は、構築あるいは補強のために、斜面のほぼ全面に拳大~人頭大の円錐を不規則に積み上げた後、土を盛り付けたものである。なお、段差斜面の立ち上がり角度は約45°を測る。

水田面については2面認められ、一つの区画はA区Ⅰ・Ⅱ面より規模は大きい。畦畔は部分的に消滅していることが多いが、東西畦畔は残りがよく、畦畔の覆土を除去すると人頭大の円錐を列状に配置し基礎を構築していることが判明した。それぞれの面は水平レヴェルであるが、東西畦畔を境に両者の間に約10~15cmの高低差があり、北側区画のほうが高い。

床土の土壤は、湧水の影響もあるが、極小~拳大の砂礫と非常に水分を含むものである。

#### ●自然科学分析結果

第Ⅲ面床土(A区第20層)は堆積厚があり、上部と下部でサンプリングをおこなった。検出されたプラント・オパールは上部では4,060個(試料1g当たり)、下部では112,000個(試料1g当たり)であった。検証例と比較すると下部では22倍以上の個数が検出され、稲作の可能性は極めて高いと推測できる。

### 4) B区第1面 (遺構関係 遺構図:第7回・全体写真:写真5・部分写真15~16/遺物関係 実測図:第12回・写真:写真23・観察表:2)

#### ●検出状況

事前に設定した試掘坑により水田面の存在は確認していたが、重機による表土及び擾乱層を除去後、人力による掘り下げ作業中、A区Ⅰ・Ⅱ面と同様な形状を窺わせる等間隔の畝頂部が確認されB区第1面の存在を確定した。

#### ●水田の形状

畝の認められる範囲は調査区南部分のみに限定されている。

畝の形状は、畝自体の規模は異なるが、配列間隔や形状はA区第Ⅰ・Ⅱ面との共通性を窺わせている。しかし、水田面として捉えられるのは部分的であるため区画の様相は不明。面積は180.7m<sup>2</sup>である。

#### ●水田の使用時期

近世以降。A区各面との相關関係については不明。

#### ●出土遺物

出土遺物は16点を数えるが、すべて破損や磨滅の激しいものである。

#### ●遺構の状況

畝の遺存度は良好である。

畝の規模については、幅40cm、高さ16cm、畝の間隔80cm(ともに平均値)で、合計20本を数える。畝は、等間隔でほぼ平行な配列であり、主軸N=25°-E方向に直線的に延びる。全体的には規則性のある配列がなされている。個々の畝については、A区と比較して幅広で高いものである。

平面的広がりについては、ほぼ水平レヴェルで広がっているが、西から東方向にかけて10cmの傾斜が計測されている。

畝が確認されたのは、調査区南半分のみであり、北半分については畝などの遺構は存在せず、畝頂部と同一のレヴェルで広がる空間である。

このことから、B区第1面は、一水田面の北限を検出したものと判断できる。また、東から12~15本目の畝は途中で消滅しているが、周辺の畝と調査区南壁(写真16)の状況から畝は調査区よりさらに南へ展開するであろうと考えられる。

#### ●自然科学分析結果

第Ⅰ面床土(B区西壁第1層)で検出されたプラント・オパールは55,900個(試料1g当たり)であった。検証例と比較すると11倍以上の個数が検出され、稲作の可能性は極めて高いと推測できる。

### 5) B区第2面 (遺構関係 遺構図:第8回・全体写真:写真6・部分写真17~20/遺物関係 実測図:第12回・写真:写真23・観察表:2)

#### ●検出状況

事前に設定した試掘坑により第Ⅱ面の存在はすでに確認されおり、第Ⅰ面調査終了後検出作業にかかる。

#### ●水田の形状

大きさは、調査区南側で小畝群で構成される面と、調査区北側は規模の大きい畦畔で南北に2区画され、合計3つの水田面が検出された。小畝群や畦畔の形状、区画の規模と配置からA区第Ⅲ面、畝の主軸方向からB区第Ⅰ面との共通性が考えられる。区画面積は、南側の区画から91.6m<sup>2</sup>、中央の区画208.4m<sup>2</sup>、小畝群82.9m<sup>2</sup>となる。

#### ●水田の使用時期

近世以降。

## ●出土遺物

自然流木が散在している。出土遺物は27点である。詳細については第3章4節に記載してあるが、他の面と同様に遺物の年代から水田使用時期を決定することはできない。

## ●遺構の状況

調査区南側の小礫群は、他の面で検出された礫と比較すると明確な形状のものではない。規模については、幅10~30cm、高さ2~5cm、間隔10~40cmの数値幅で格差が生じており、不均一な形状・配列である。礫の主軸はN-14°-Eと概ね平行であるが、途中消滅や部分残存により形状に規則性は見出せない。

また、小礫群と畦畔で区画される面との境界は、西側は浅い溝によって区画されるが、東側によるにしたがい溝は消滅し、境界は不明瞭になる。両者の間にレヴェル差は認められない。

中央の区画は東・西に畦畔が確認されていないことから東西方向に長い水田面となっている。また、G-14グリッド付近では、用途不明の大小30個からなる礫の配列が東西方向に検出されている。

最も南の区画は、中央の区画と高低差はほとんどない。検出面積は狭いが、西側で一部分だけであるが南北方向に延びる畦畔が検出されている。

全体の平面的広がりについては、ほぼ水平レヴェルで展開するが、東から西方向にかけて7cmの傾斜が確認されている。本遺跡において東高西低の傾きは特徴的である。I:壤は湧水の影響もあるが、非常に水分を含んだシルト質土壤で、部分的に酸化現象が認められる。

## ●自然科学分析結果

第Ⅱ面床土(B区第6層)で検出されたプラント・オーバールは56,500個(試料1g当たり)であった。検証例と比較すると11倍以上の個数が検出され、稻作の可能性は極めて高いと推測できる。

## 6) B区第3面 (遺構関係 遺構図:第9図・全体写真:写真7・部分写真21~22/ 遺物関係 実測図:第12図・写真:写真23・観察表:2)

### ●検出状況

第Ⅱ面調査中に設定した試掘坑より本調査では比較的大型に分類される畦畔の断面が確認された。これにより、第Ⅱ面に統く第Ⅲ面の存在を確定した。

### ●水田の形状

大きさは、東西と南北に走る畦畔により区画されている。水田としては4面が検出されたものと判断する。また調査区南東では、拳大の礫が段差をもち、波紋状に大きく堆積している。面積は、南区画から39.2m<sup>2</sup>、中央区画118.7m<sup>2</sup>、北区画3.9m<sup>2</sup>、西区画25.2m<sup>2</sup>である。

### ●水田の使用時期

近世以降。

### ●出土遺物

自然流木が散在し、遺物は79点が出土している。詳細については第3章4節に記載してあるが、他の面と同様に遺物の年代から水田使用時期を決定することはできない。

### ●遺構の状況

水面面は、4面が確認されている。中央に検出された水田面は、四方を畦畔に囲まれ、明確な一区画として捉えられる本調査において稀有名なものである。この水面面の畦畔を境界とする水田面が西・南・北に接して検出されているが、この3面は調査区の關係から一部分しか検出できず全体の様相を見ることはできない。

畦畔については、南側畦畔の一部が消滅しているほかほぼ同じ規格で、平行して延びている。B区第Ⅱ面の畦畔と方向性が重なる点は興味深い。畦畔の規模は、幅は概ね120cm前後を測り、高さについても大きな差はない、盛土で構築している。但し、西側畦畔は、拳大以上の礫が混ざり込むもので、他と比較して様相を異にする。

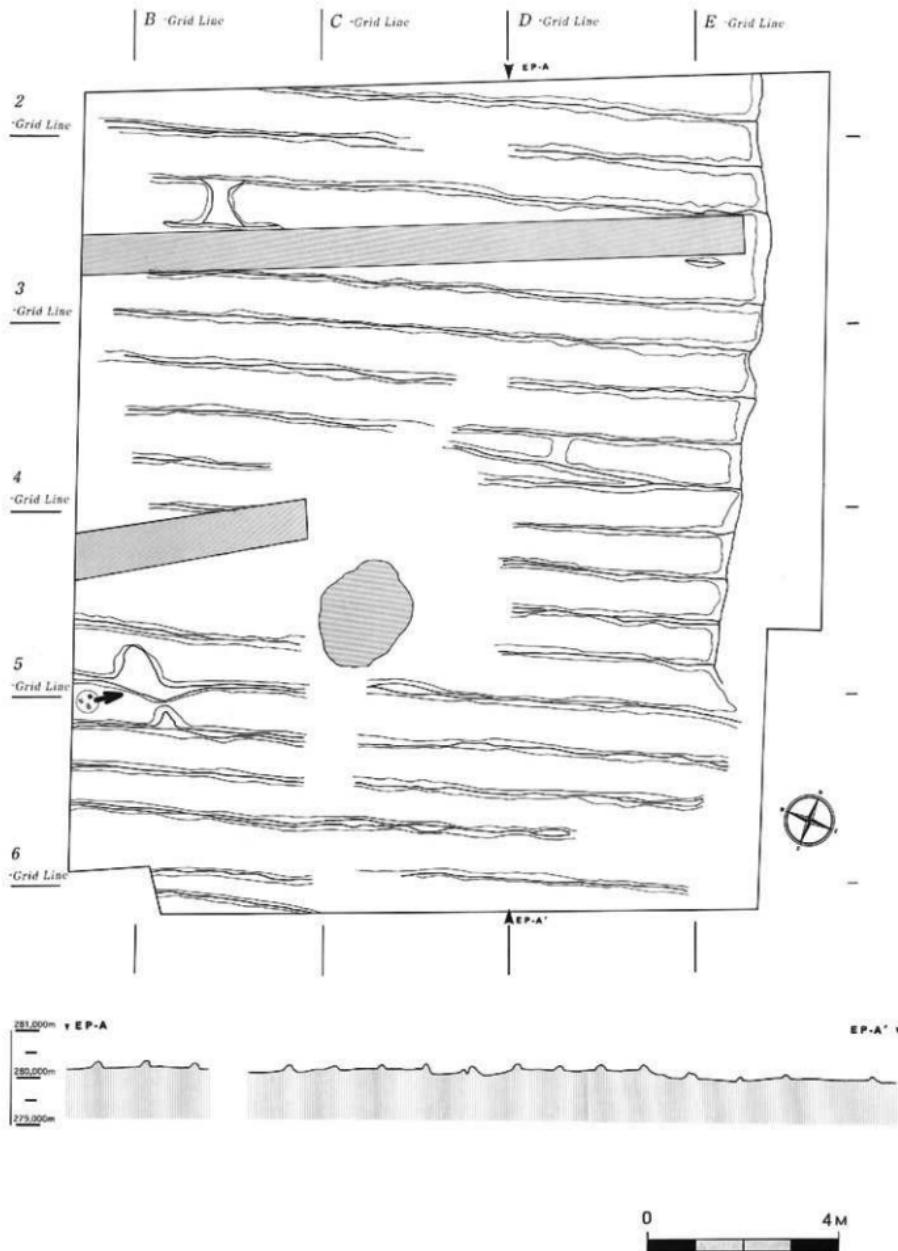
高低差は、部分的には差があるものの南区画から278.7m<sup>2</sup>、中央区画278.8m<sup>2</sup>、北区画278.8m<sup>2</sup>、西区画278.9m<sup>2</sup>(ともに平均値)を測り個々の区画は水半レヴェルである。

調査区の東には拳大以上の礫堆積が認められ、3段からなる段差を作り東から西に向かって低くなっている。礫の密度は、土壤も混ざり込むが密である。調査区南壁断面での観察では、礫層(B区南壁第6層)の上に第Ⅲ面床土が確認されていることから第Ⅳ面より以前に堆積したもので、起因については不明だが自然堆積の可能性が強い。

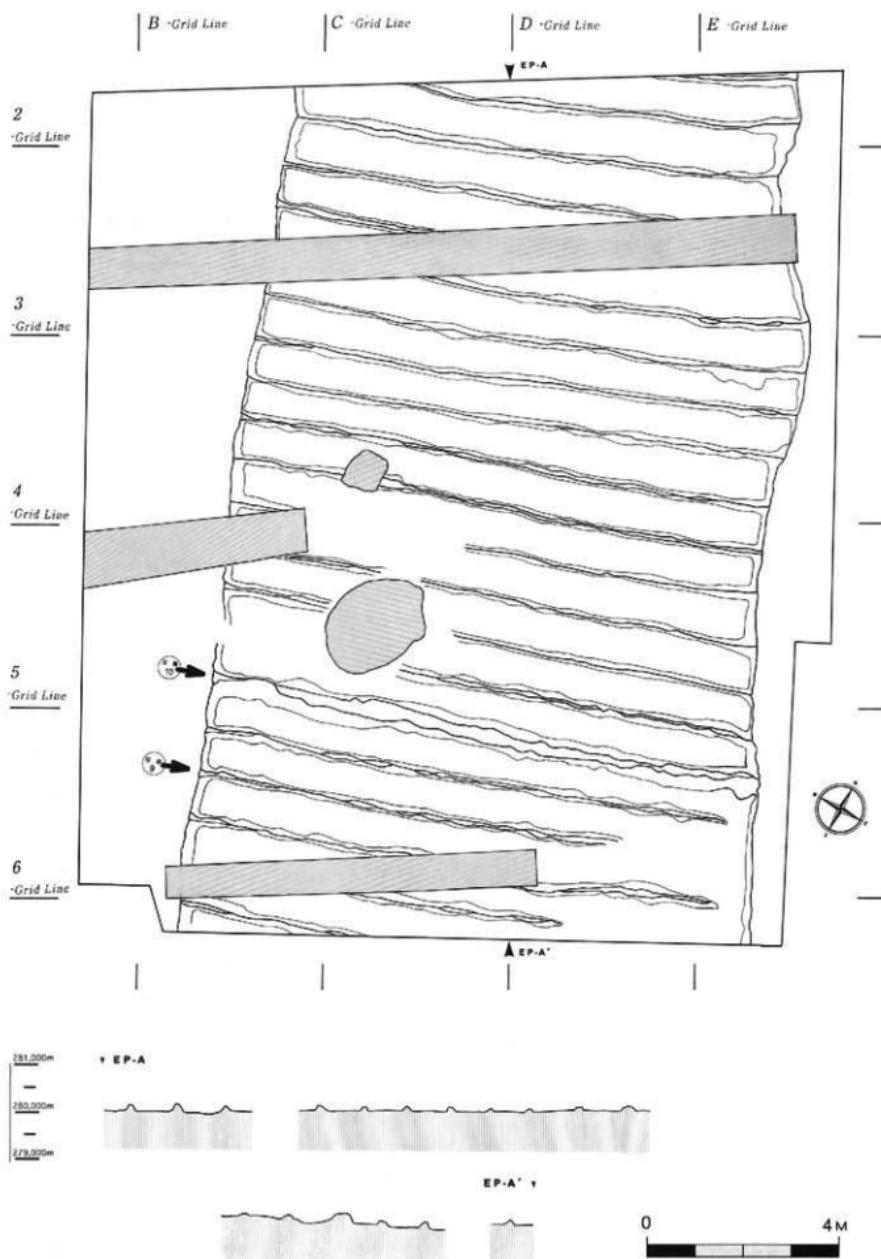
### ●自然科学分析結果

第Ⅲ面床土(B区南壁第8層)で検出されたプラント・オーバールは5,500個(試料1g当たり)であった。検証例と比較すると若干數値を上回るだけで、他の各面と比較すると稻作の可能性も減少する。ただし、上層のB区第7層では46,800個(試料1g当たり)、更に上層では15,000個(試料1g当たり)前後が検出されている。

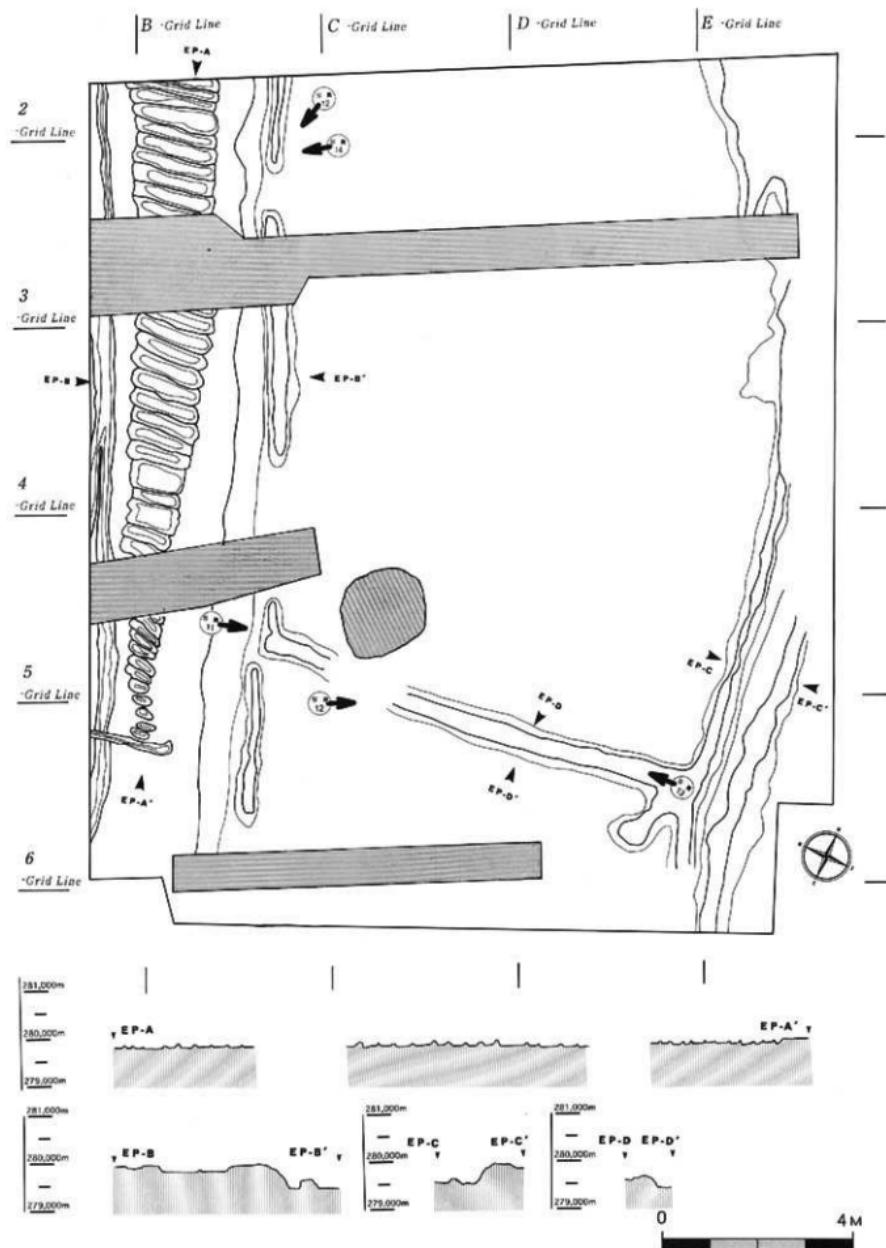
なお、第Ⅲ面床土以下では、プラント・オーバールは検出されなかった。



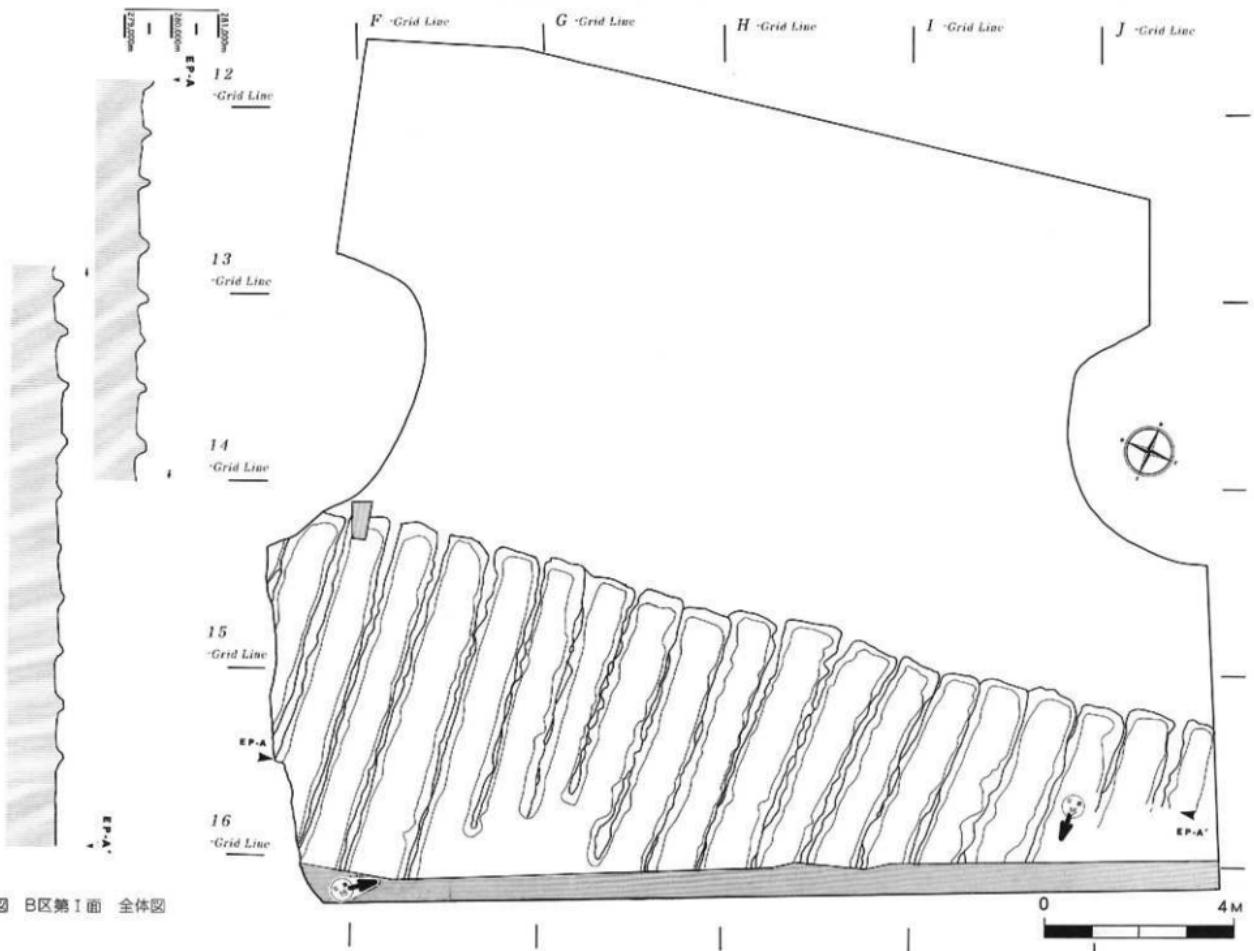
第4図 A区第1面 全体図



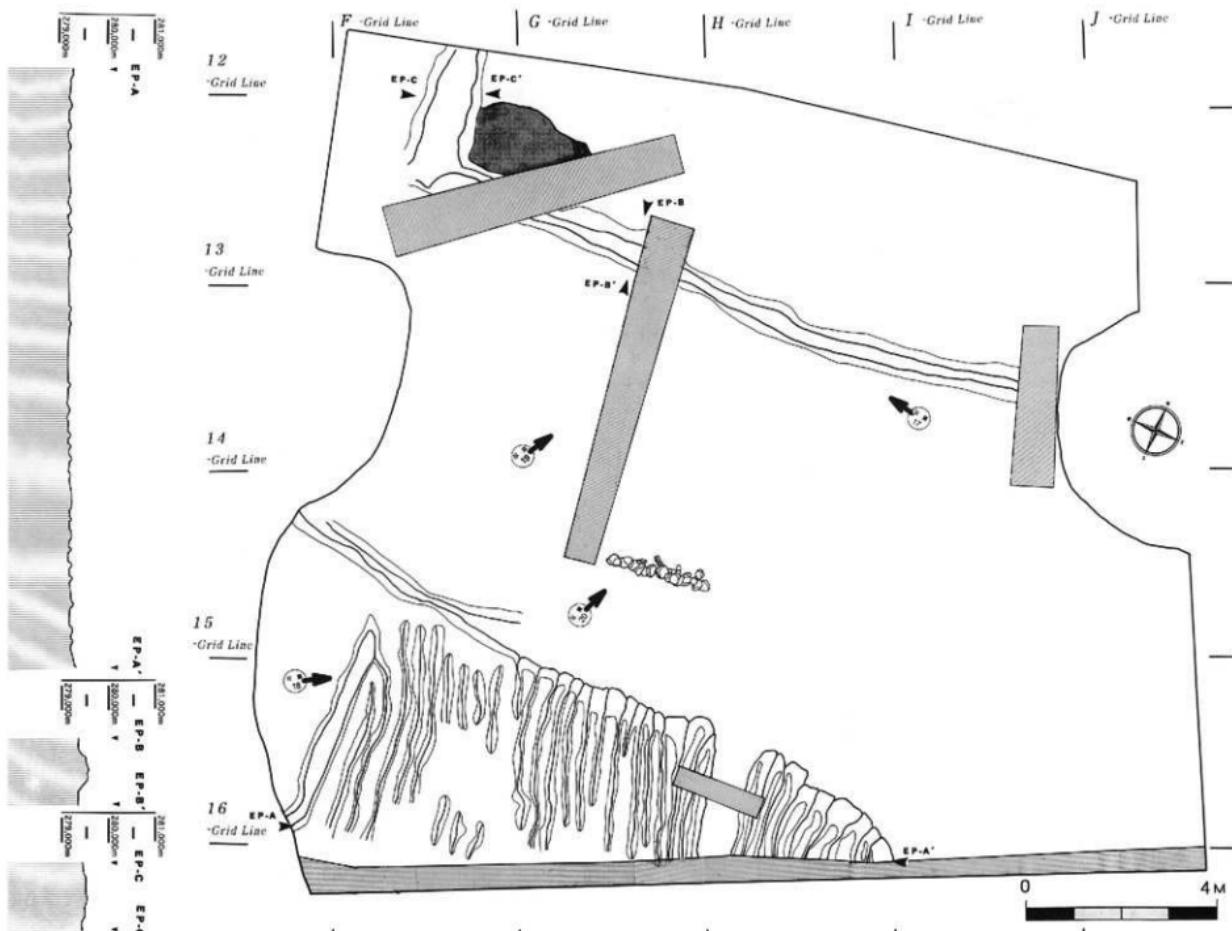
第5図 A区第II面 全体図



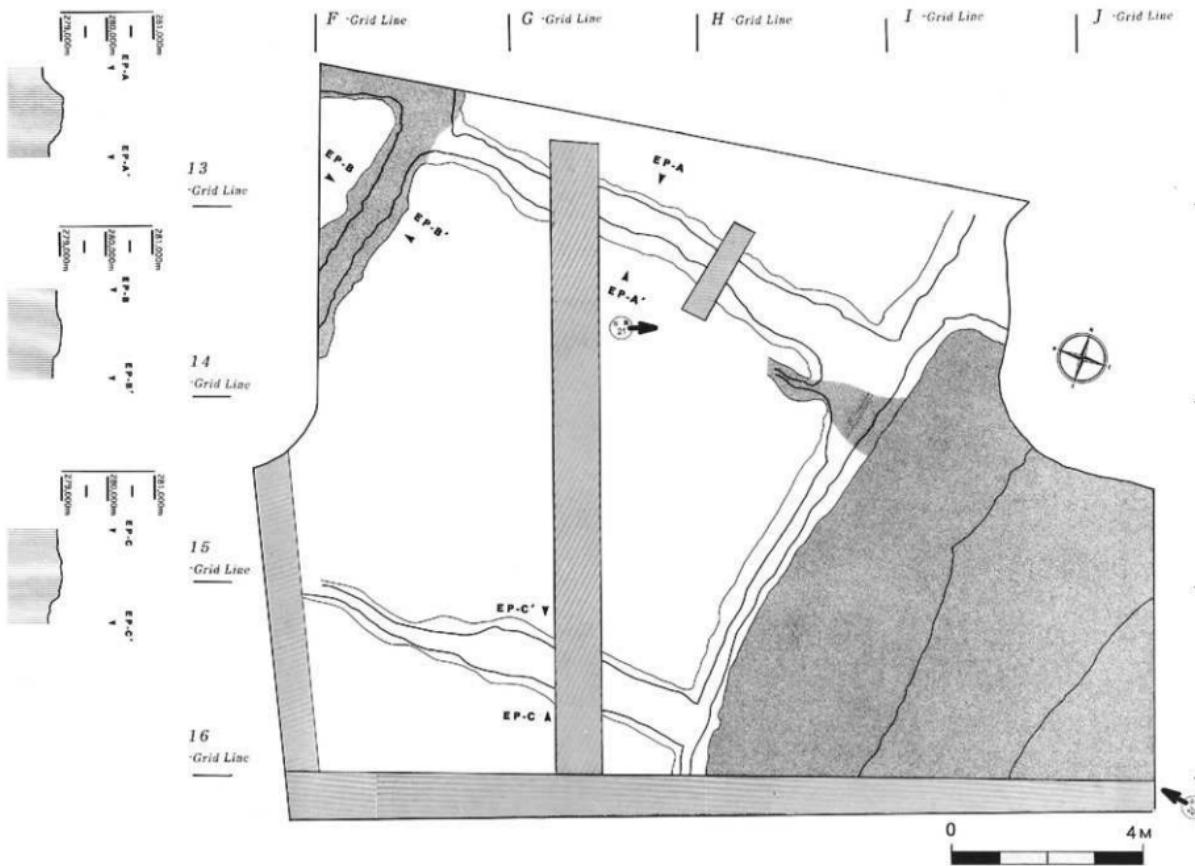
第6図 A区第II面 全体図



第7図 B区第Ⅰ面 全体図



第8図 B区第II面 全体図



第9図 B区第III面 全体図



写真2 A区第Ⅰ面

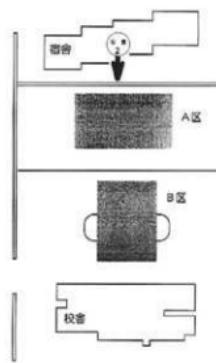


写真3 A区第Ⅱ面

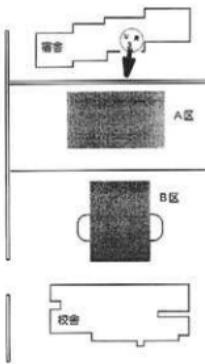


写真4 A区第Ⅲ面

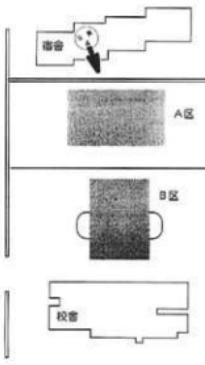




写真5 B区第Ⅰ面

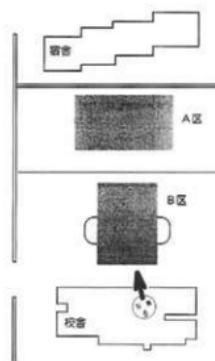


写真6 B区第Ⅱ面

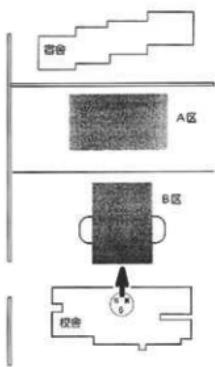


写真7 B区第Ⅲ面

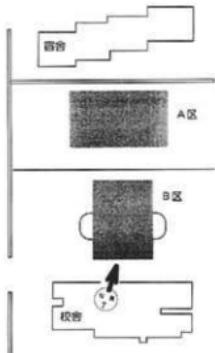




写真8 A区第Ⅰ面 敵平坦部

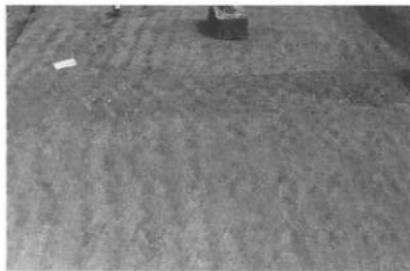


写真9 A区第Ⅰ面 敌除去後



写真12 A区第Ⅲ面 流水痕跡



写真10 A区第Ⅱ面  
北より17本目の敵検出状況



写真11 敵覆土除去後



写真13 A区第Ⅲ面 小敵群



写真14 法の構築石積



写真15 B区第Ⅰ面 故検出状況



写真16 B区第Ⅰ面 南壁土層断面



写真17 B区第Ⅱ面 東西畦畔



写真18 B区第Ⅱ面 故検出状況



写真19 B区第Ⅱ面 使途不明配列痕



写真20 B区第Ⅱ面 石積検出状況



写真21 B区第Ⅲ面 東西畦畔



写真22 B区第Ⅲ面 碑堆積状況

### 第3節 出土した遺物

発掘調査によって得られた出土遺物はA区で233点、B区で121点を数え、総点数は354点となる。水田跡という遺構の性格上、出土点数は少なく、残存状況も良好とは言えない。しかし、遺物の所産時期は古墳時代前期から近現代に及び、東河原遺跡とその周辺の歴史環境を考える上で有効な資料が得られたものと考えられる。ここではそれらの遺物データの整理を行なうが、各遺物の内容記述(器種・部位・計測値・推定される所産時期・特徴など)は第1表、第2表にまとめ、遺物の時期別構成や数量分布について第10図にまとめたとおりである。

#### 1) A区 (第1表1~14、第2表15~38・52、第11図1~14、第12図15~38・52、写真図版23)

A区より出土した遺物は総数233点を数え、その内訳は古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代・中世・中世～近世・近世・近現代に及んでいる。このうち図示できた資料は39点である。その内容は第1表および第2表に示したとおりであるが、古墳時代前期から近現代までの遺物を図示した。

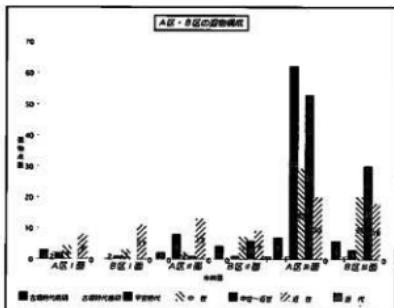
最も新しい水田面である第I面からは21点の遺物が出土し、その時期は古墳時代前期から近世に至る。第II面からは26点が出土し、その時期は古墳時代後期から近世に至る。最も古い水田面である第III面からは185点が出土し、その時期は古墳時代前期から近世に至る。

遺物出土量は第I面→第II面→第III面の順に多く、特に第III面が著しく多い。また、第III面では平安時代・中世・中世～近世の遺物が多く見られ、周辺地に該当の跡跡が存在する可能性を強く示唆している。なお、第I面水田土壤中より近現代の遺物である「米国M69式集束焼夷弾」(第12図-52)が直立して出土した。これは1945年7月6日の甲府空襲時に投下されたものと考えられ、この地域の重要な歴史断片として掲げたものである。

#### 2) B区 (第2表39~51、第12図39~51、写真図版23)

B区より出土した遺物はA区より少なく総数121点である。その内訳は古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代・中世・中世～近世・近世・近代に及んでいる。このうち図示できた資料は13点である。その内容は第2表に示したとおりであるが、中世～近世から近代までの遺物を図示した。

第I面からは15点が出土し、その時期は古墳時代後期から近世に至るが、小片が多く図示できたものはない。第II面からは27点が出土し、その時期は古墳時代前期から近代に至る。このうち第12図-44の磁器片は近代(明治時代)の所産が考えられ、この遺物がA・B区の水田面の時期区分(特に第II面と第III面の差)についての重要なポイントとなるであろう。第III面からは79点が出土し、その時期は古墳時代前期から近世に至る。遺物出土量はA区同様に第I面→第II面→第III面の順に多く、特に第III面が多い。



第10図

第1表

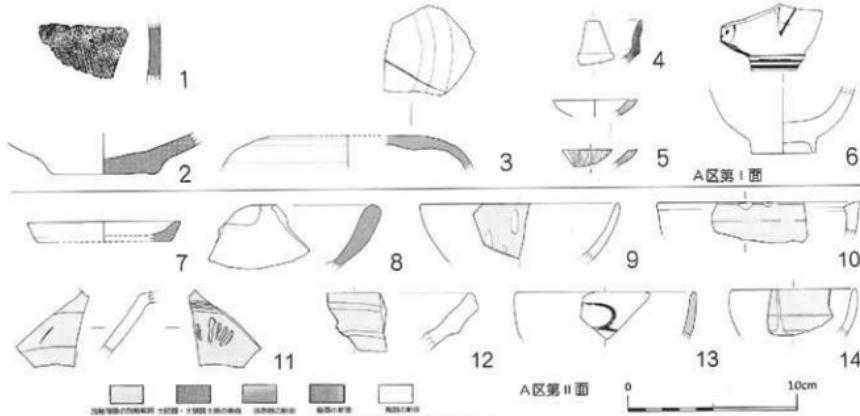
番号	出土地点	注記	種類	計測値	備考(時期・特徴・その他)
1	A区-I面	A12	土器器・壺・体	残高3.4cm・径不明	古墳時代前期・変形土器の破片・外面は刷毛目
2	A区-I面	A17	土器器・壺・底	残高2.4cm・底径6.2cm	古墳時代?・壺あるいは壺の底部・外面は質撫で
3	A区-I面	A1	須恵器・壺・体	残高1.9cm・推定径15cm	古墳時代後期・外面に範記弓字の沈線あり
4	A区-I面	A4	土器器・杯・口	残高2.6cm・口径不明	古墳時代後期(6c中葉?)・赤褐色の胎土
5	A区-I面	A11	磁器・紅里・口	残高0.9cm・推定口径5cm	19世紀初頭～19世紀中・外面は貝殻模の文様
6	A区-I面	A7	磁器・碗・底	残高3.9cm・推定底径4cm	18世紀末～19世紀・肥前系・外腹のみ具模様・質入
7	A区-II面	A95	土器質・壺・口	器高1.2cm・推定口径0.2cm	中世～近世・かわらけ・灯明直・底部に糸切痕あり
8	A区-II面	A57	土器質・釜・口	残高3.9cm・口径不明	中世～近世・鍋系の土器か?・胎土は内耳土器類似
9	A区-II面	A61	陶器・碗・口	残高3.4cm・推定口径12cm	近世?・灰釉・器表面は薄緑色・外面は一部未施釉
10	A区-II面	A62	陶器・蘇・口	残高2.4cm・推定口径12cm	近世?・羅戸美濃系灰釉・器表面は緑色・水跡か?
11	A区-II面	A82	陶器・壺・体	残高3.5cm・口径不明	近世以降?・三島手・胎土は赤褐色・白色釉・
12	A区-II面	A72	陶器・壺・口	残高3.6cm・口径不明	近世以降?・胎土は白色・器表面は赤褐色・鉢か?
13	A区-II面	A87	磁器・碗・口	残高2.9cm・推定口径11cm	18世紀末～19世紀・肥前系・外腹に舟須絞
14	A区-II面	A138	陶器・碗・口	残高2.8cm・推定口径7.4cm	近世以降?・羅戸美濃系・アメ釉・小振りの碗?

種類標の口・頸・体・接・底の表記は各々、口縁部・頸部・体部・接合部・底部の土器部位を表している。

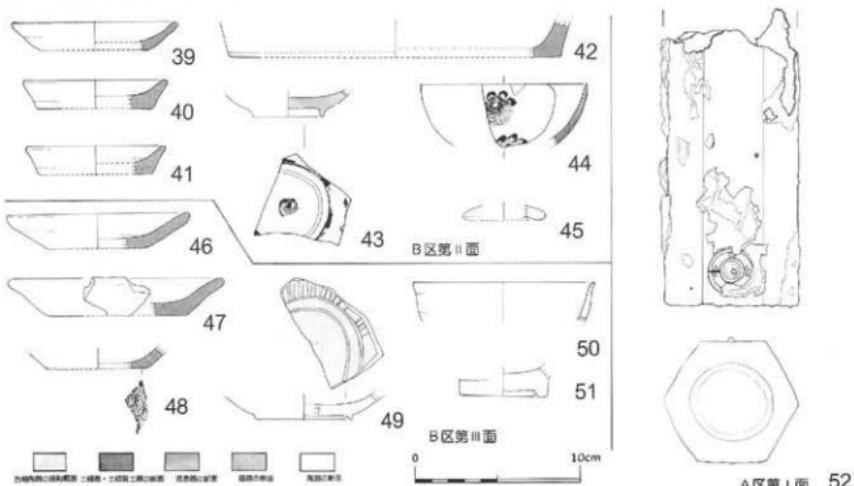
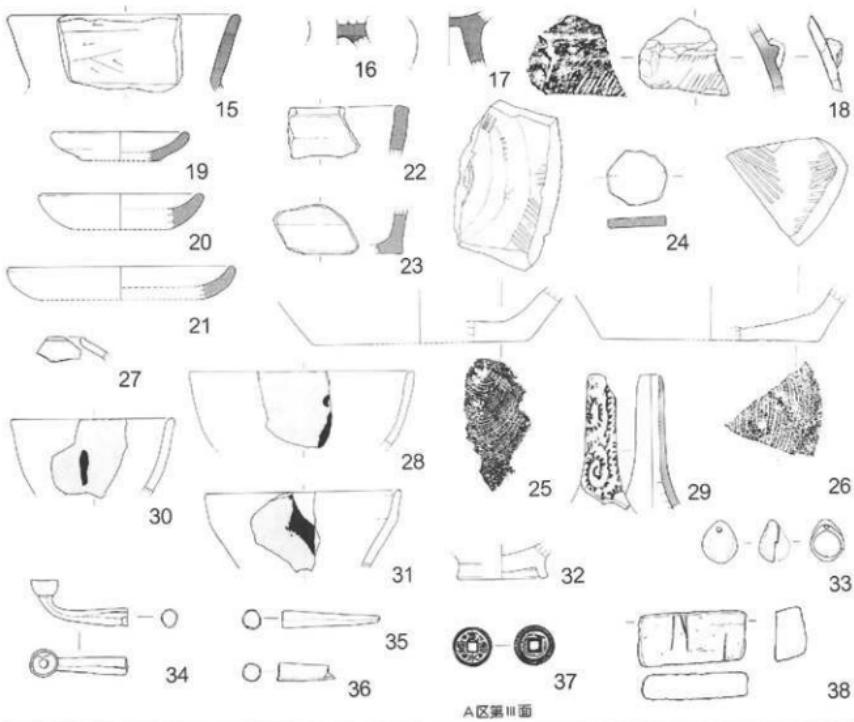
第2表

番号	出土地点	注記	種類	計測値	備考(時期・特徴・その他)
15	A区-Ⅲ面	A15下	土師器・壺・口	残高4.4cm・推定口径14cm	古墳時代前期・広口壺の口縁部破片
16	A区-Ⅲ面	A187	土師・高杯・接	残高1.3cm・接合部幅3.7cm	古墳時代前期・接合部の約半分のみ残存
17	A区-Ⅲ面	A230	土師・高杯・接	残高3.2cm・接合部幅4cm	古墳時代前期・高杯の接合部のみ完存
18	A区-Ⅲ面	A257	須器・壺・体	残高4.7cm・体部僅不明	平安時代(9世紀代)・突唇付四耳壺の体部破片
19	A区-Ⅲ面	A302	土師質・壺・口	器高1.8cm・推定口径8.4cm	中世～近世・かわらけ
20	A区-Ⅲ面	A271	土師質・壺・口	残高2.1cm・推定口径10cm	中世～近世・かわらけ
21	A区-Ⅲ面	A285	土師質・壺・口	残高2cm・推定口径13.8cm	中世～近世・かわらけ
22	A区-Ⅲ面	A291	土師質・壺・口	残高3.1cm・口径不明	中世～近世・内耳土器の口縁部破片
23	A区-Ⅲ面	A306	土師質・壺・底	残高2.9cm・底部僅不明	中世・内耳土器の底部破片
24	A区-Ⅲ面	A209	土師質・壺・底	残高3.6cm×3.5cm・重さ8g	中世・内耳土器底部を加工した円盤状製品
25	A区-Ⅲ面	A164	陶器・擂鉢・底	残高3.1cm・推定底径13cm	近世・産地不明・胎土は白色・17世紀同一個体
26	A区-Ⅲ面	A168	陶器・擂鉢・底	残高3.3cm・推定底径13cm	近世・産地不明・底部に糸切り痕あり
27	A区-Ⅲ面	A186	陶器・小壺・口	残高1.6cm・口径不明	中世～近世・瀬戸美濃系・灰釉・茶葉の可能性大
28	A区-Ⅲ面	A200	陶器・碗・口	残高4.6cm・推定口径13.6cm	近世以降?・瀬戸美濃系・灰釉天目茶碗
29	A区-Ⅲ面	A13上	磁器・小瓶・頸	残高8.2cm・口径1.6cm	近世(19世紀前半)・肥前系・御所酒利・朝唐草文
30	A区-Ⅲ面	A259	陶器・瓶・底	残高4.8cm・推定口径10cm	近世以降?・瀬戸美濃系・灰釉天目茶碗
31	A区-Ⅲ面	A301	陶器・碗・口	残高4.8cm・推定口径11.8cm	近世以降?・瀬戸美濃系・灰釉天目茶碗
32	A区-Ⅲ面	A305	陶器・碗・底	残高1.9cm・底部径5.2cm	中世～近世・瀬戸美濃系
33	A区-Ⅲ面	A154	土鉢	高さ2.5cm・幅2.1cm	近世・半分のみ残存・土師質・上位に小孔穿たれる
34	A区-Ⅲ面	A116	陶器(雁首)	陶製・全長5.9cm・7.2g	近世・火葬内に埋草残存
35	A区-Ⅲ面	A92	煙管(吸口)	銅製・残存長5.8cm・4.2g	近世・吸口部分の端のみを欠損
36	A区-Ⅲ面	A91	煙管(吸口)	銅製・残存長3.5cm・3.1g	近世・両端を欠損
37	A区-Ⅲ面	A270	煙管(炭水清實)	直径2.5cm・孔径5mm・7g	近世・書体は松本銘(1637年)に類似
38	A区-Ⅲ面	A165	磁石	長6.5cm・幅3.2cm・64.7g	不明・磁灰岩製・表面に4箇所の使用跡あり
39	B区-Ⅱ面	B61	土師質・壺・口	器高1.7cm・推定口径10cm	中世～近世・かわらけ
40	B区-Ⅱ面	B63	土師質・壺・口	器高1.7cm・推定口径10cm	中世～近世・かわらけ・灯明皿(口縁端に煤付着)
41	B区-Ⅱ面	B91	土師質・壺・口	器高1.7cm・推定口径8.4cm	中世～近世・かわらけ・灯明皿(口縁端に煤付着)
42	B区-Ⅱ面	B51	土師質・瓶・底	残高2.2cm・推定底径20cm	中世～近世・内耳土器の底部破片
43	B区-Ⅱ面	B82	磁器・碗・底	残高1.6cm・推定底径4.4cm	近世(18世紀後半)・肥前系・底足は「湯福」
44	B区-Ⅱ面	B60	磁器・碗・口	残高3.8cm・推定口径10cm	近世～近代・肥前系・外側に舟頭紋・菊花文
45	B区-Ⅱ面	B95	陶器・?・端部	残高9.0cm・推定底部径5cm	中世～近世?・瀬戸美濃系・台付器の台端部か?
46	B区-Ⅲ面	B117	土師質・壺・口	器高2.1cm・推定口径11cm	中世～近世・かわらけ・底部調整不明
47	B区-Ⅲ面	B157	土師質・壺・口	器高2.3cm・推定口径13cm	中世～近世・かわらけ・内面が培塿場に火熱受ける
48	B区-Ⅲ面	B125	土師質・壺・口	残高1.3cm・推定底径	中世～近世・かわらけ・底部に糸切り痕あり
49	B区-Ⅲ面	B120	陶器・壺・底	残高1.6cm・推定底径5.8cm	中世(16世紀?)・瀬戸美濃系・灰釉菊皿
50	B区-Ⅲ面	B130	陶器・前・口	残高2.4cm・推定口径11cm	時期不明・白磁?・口縁端部が内反する外反する
51	B区-Ⅲ面	B129	陶器・碗・底	残高2.1cm・推定底径5.6cm	中世・瀬戸美濃系・灰釉天目茶碗・胎土は白色
52	A区-Ⅱ面	A323	焼夷弾・基部	残高17.5cm・幅10cm	近現代・米国M69式集束焼夷弾・1945年甲府空襲

種類機の口・頸・体・接・底の表記は各々、口縁部・頸部・体部・接合部・底部の土器部位を表している。



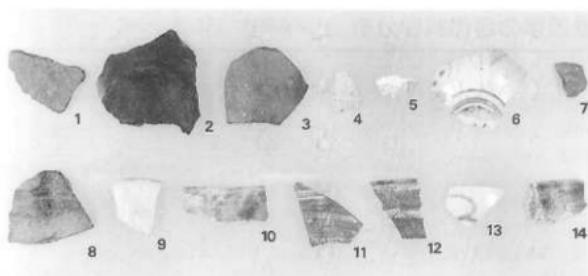
第11図 出土遺物(1)



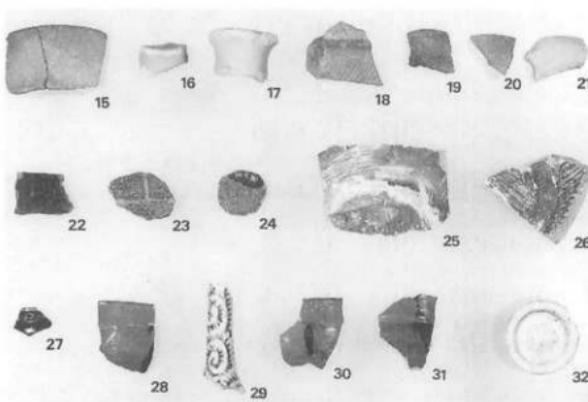
1. 灰褐色陶片 2. 灰褐色陶片 3. 灰褐色陶片  
4. 灰褐色陶片 5. 灰褐色陶片 6. 灰褐色陶片  
7. 灰褐色陶片 8. 灰褐色陶片 9. 灰褐色陶片  
10. 灰褐色陶片 11. 灰褐色陶片 12. 灰褐色陶片  
13. 灰褐色陶片 14. 灰褐色陶片 15. 灰褐色陶片  
16. 灰褐色陶片 17. 灰褐色陶片 18. 灰褐色陶片  
19. 灰褐色陶片 20. 灰褐色陶片 21. 灰褐色陶片  
22. 灰褐色陶片 23. 灰褐色陶片 24. 灰褐色陶片  
25. 灰褐色陶片 26. 灰褐色陶片 27. 灰褐色陶片  
28. 灰褐色陶片 29. 灰褐色陶片 30. 灰褐色陶片  
31. 灰褐色陶片 32. 灰褐色陶片 33. 灰褐色陶片  
34. 灰褐色陶片 35. 灰褐色陶片 36. 灰褐色陶片  
37. 灰褐色陶片 38. 灰褐色陶片 39. 灰褐色陶片  
40. 灰褐色陶片 41. 灰褐色陶片 42. 灰褐色陶片  
43. 灰褐色陶片 44. 灰褐色陶片 45. 灰褐色陶片  
46. 灰褐色陶片 47. 灰褐色陶片 48. 灰褐色陶片  
49. 灰褐色陶片 50. 灰褐色陶片 51. 灰褐色陶片

0 10cm

第12図 出土遺物(2)



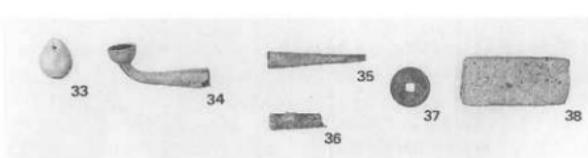
No. 1~6 · 52……A区第2面出土遺物  
No. 7~14……A区第2面出土遺物



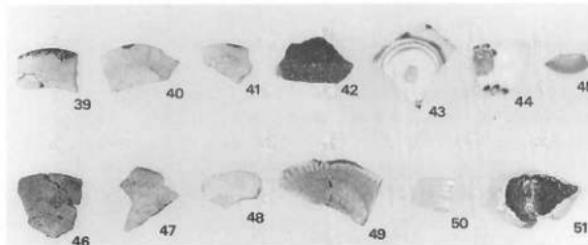
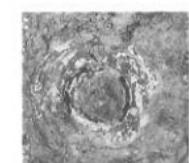
No. 15~32……A区第2面出土遺物



52



(1) 52(骨角) (2) 52(骨角)



No. 39~45……B区第2面出土遺物

No. 46~51……B区第2面出土遺物

写真23

## I. 東河原遺跡の概要

山梨県東河原遺跡は、甲府市北部の荒川右岸の扇状地に位置し、北側には山地が接する。本遺跡の標高は約280mである。この遺跡では、A区でI~III面、B区でI~IV面の計6面の水田址と考えられる畝状遺構が確認された。このうち、A区I面については、低い畝状遺構が同一方向に延びるという特異的な形態であることから、畑作との関連についても考慮する必要性が指摘されている。こうしたことから、遺構の性格の解明及び古環境の復原を目的として、プラント・オパール、珪藻、花粉の各微化石の検討を行った。なお、この遺跡では現地調査及び試料採取は行っていないことから、資料と分析試料に基づき分析地点の概要を以下に示す。

分析は、A区西壁、B区西壁、B区南壁の3地点を行った。各層のセクション図を第3章第3図に、分析地点の地質柱状図と分析試料採取層準を第13図に示す。

A区西壁では、第I面(15層)と第II面(20層)の2つの遺構が確認されている。堆積物は、全般に砂が卓越する。分析層準では、灰褐色ないし褐色のシルト質細～中粒砂ないし中～粗粒砂からなり、含砂率は57～79%である。なお、7aは旧耕作土とされている。

B区西壁は、層厚が80cm程度と薄いが、第I～III面(1・6・7各層)の3つの遺構が確認されている。堆積物はA区と同様に褐色ないしにぶい褐色の砂を主体とし、セクション図によると4層以下を複合して3層以上が覆うようである。分析試料では、最下部の7bが粗～極粗粒砂と粗く、3・4でシルト混じり粗粒砂、他はシルト質細～中粒砂からなる。含砂率は、粗粒な3・4・7bで85%前後、他は55～82%である。

B区南壁では、第I面(2層)と第III面(8層)が確認されている。堆積物は、各地点と同様に褐色ないしにぶい褐色砂が卓越する。この地点は、セクション図によると既ね整合的に堆積する。なお、2aは畦畔である。分析試料は、7・8・9bでシルト質細～粗粒砂、9aは中粒砂、他はシルト質細ないし中粒砂である。含砂率は、9aで92%と高く、7aでは47%、他は55～85%である。

## II. 東河原遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂(バレオ・ラボ)

甲府市池田に所在する東河原遺跡は、笛吹川に合流する荒川の扇状地上に立地している。本遺跡においては1993年4月より試掘調査が実施され、時期については不明であるが、3ないし4面の水田址が確認された。その後に行われた本調査においてはこれまでにI～III面が確認されている。しかしながら、これらが全て水田址であるのかどうか、特にA区I面の畝状遺構について「畑作」との関連性も考慮する必要があると考えられている。

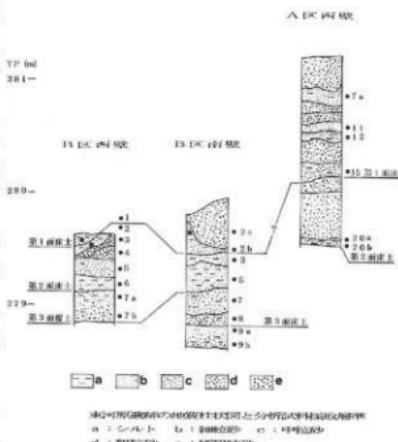
イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、珪酸を多量に吸収することが知られており(藤原 1976)、葉に形成された機動胞球體(プラント・オパール)についてはイネを中心とした形態分類の研究が進んでいる(藤原 1978など)。このように、プラント・オパール分析は稲作の検討には有効であり、ここでは3地点より採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、上記各遺構面における稲作の有無についての検討結果を以下に示した。

### 1. 試料と分析方法

プラント・オパール分析に供した試料は、A区西壁より6点、B区西壁より8点、同区南壁より8点の計22点である。堆積物(試料)の詳しい記載については別章を参照して頂き、ここでは分析に供した試料についての簡単な記載を示すと、A区西壁の試料7(旧耕作土)、11、12、20a(第II面床土)、20b(第II面床土)はシルト混じりの細粒砂、8(第I面床土)はシルト分を若干含む細～中粒砂である。B区西壁の試料1(第I面床土)～5はシルト混じりの細粒砂、6(第II面床土)は砂質シルト、7a(第III面覆土)は砂質シルト～シルト質砂、7b(第III面覆土)はシルト混じりの細～中粒砂である。同じくB区の南壁の試料2a(第I面畦畔部分)、2b(第I面床土)、3、7、9aはシルト質砂、5(第III面覆土)は砂質シルト、8(第II面床土)、9b(第IV面)は砂質シルト～シルト質砂である。なお本遺跡においては、出土遺物が古墳時代から近世までと多岐にわたっており、これら1～3面の時期についての特定は今のところ難しい状況にある。

上記22試料について次のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーに採り、約0.02gのガラスビ



第13図 土層図

ーズ(直径約40 μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を20~30cc加え、脱有機物処理を行う。次に水を加え、超音波モジュナイザーによる試料の分散後、沈降法により20 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞壁酸体由来するプラント・オバールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。

## 2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オバール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オバール個数を求め第14図、その分布を第15図(A区西壁)、第16図(B区西壁)、第17図(B区南壁)に示した。なお、分布図に示した柱状図は模式的に表したものである。また以下に示す各分類群のプラント・オバール個数は試料1g当りの個数である。

検鏡の結果、B区南壁の下部試料9a、9bの2試料を除く20試料よりイネのプラント・オバールが検出され、A区西壁の試料20b(第II面床土)においては100,000個を越えており、最も10,000個を越えて検出されている。B区西壁では試料1(第I面床土)および6(第II面床土)において50,000個を越え、2~5では約15,000~約49,000個得られている。最下部の試料7a、7b(第III面覆土)においては急速に1,000個以下となっている。B区南壁では試料5(第III面覆土)で最も多くのイネのプラント・オバールが検出されており、その上位の試料では約15,000~約20,000個である。また、試料8(第III面床土)においては5,500個である。その下位の試料9aおよび9b(第IV面?)においては先に記したようにイネのプラント・オバールは検出されなかった。

イネ以外では、クマザサ属型やシバ属、ウシクサ族が1、2の試料を除く他の試料から検出されているが、個数的にはそれほど多くなく、最も多く検出されているA区西壁20bのウシクサ族でも約14,000個である。ネザサ節型多くの試料から検出されているが、数は4,000個前後である。その他、ヨシ属やキビ族など若干得られている。

## 3. 稲作について

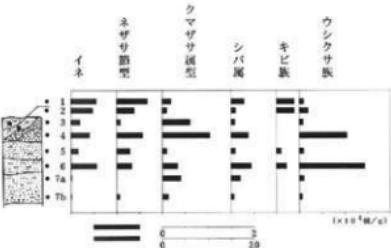
以上のように、B区南壁の最下部9a、9bを除く他の20試料よりイネのプラント・オバールが検出されている。なお、稻作の検証としてイネのプラント・オバールが試料1g当り5,000個以上検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性は高いと判断されている(古環境研究所 1989)。

A区西壁: 試料100個以上のイネのプラント・オバールが検出されており、上記稻作の検証例にしたがうと、試料採取地点付近において稻作が行われていた可能性は高いと判断される。第I面においてみられる畠状遺構については稻作との関連性も考慮する必要があると考えられているが、第I面床土試料(試料15)で約12,000個のイネのプラント・オバールが検出され、その上位試料(11、12)においてはさらに多く得られている。このように、プラント・オバール分析からはその検出個数から判断すると、畠状遺構においても稻作が行われていた可能性が非常に高いと判断される。

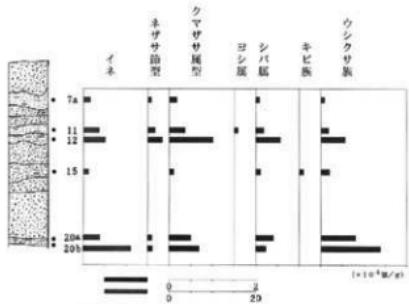
B区: 西壁、南壁の第I面および第II面の床土試料(1、2b、6)からは10,000個を越えるイネのプラント・オバールが検出されて

試料1より得られたプラント・オバール個数							
試料	イネ	ネザサ節型	シバ属	ウシクサ族	ヨシ属	キビ族	
7a	(4,300)	700	1,700	0	900	0	7,400
1	(1,100)	1,100	0	0	1,100	0	1,100
2	(5,000)	1,000	1,500	0	1,500	0	5,000
6	(5,000)	1,000	1,500	0	1,500	0	5,000
2b	(5,000)	0	1,000	1,000	0	0	6,000
20b	41,000	1,000	1,500	0	1,500	0	5,000
2	(1,100)	1,100	0	0	1,100	0	1,100
3	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
4	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
5	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
7b	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
2	47,000	2,000	1,000	0	1,000	0	5,000
11	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
12	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
15	(1,000)	1,000	0	0	1,000	0	1,000
20a	41,000	1,000	1,500	0	1,500	0	5,000
20b	41,000	0	1,000	1,000	0	0	6,000

第14図 プラント・オバール個数表



第16図 プラント・オバール分布図



第15図 プラント・オバール分布図



第17図 プラント・オバール分布図

おり、西壁においては50,000以上と非常に多く得られている。したがってこれら第Ⅰ、Ⅱ面において稻作が行われていた可能性は高いとプラント・オバール分析からは判断される。第Ⅲ面について、西壁の第Ⅲ面覆土試料(7a, 7b)においてもイネのプラント・オバールは検出されているが、数は1,000個以下と少ない。一方、南壁では第Ⅲ面の床土および覆土試料(8および9)とも5,000個以上得られ、特に覆土においては非常に多く検出されている。こうしたことから、第Ⅲ面においても稻作が行われていたと予想される。また、第Ⅳ面ではないかと検討中の南壁最下部試料9bにおいてはイネは検出されず、稻作が行われていた可能性は低いとプラント・オバール分析からは判断される。

このように、東河原遺跡のⅠ～Ⅲ面においては稻作が行われていたと判断される。この稻作が水田耕作であるかどうかについて珪藻分析結果(IV章)をみると、イネのプラント・オバールが大量に検出されている層準において概ね沼澤湿地の環境が推定されている。また、花粉分析(Ⅲ章)においては、ミズアオイ属など水田雜草を含む分類群が若干はあるが検出されている。以上の結果から、東河原遺跡における稻作は、A区Ⅰ面の歴史遺構を含め、水田耕作であったと推測されよう。

#### 4. 遺跡周辺のイネ科植物

イネに比べ、他のイネ科植物の検出数は少ない傾向である。その中でシバ属はA、B両区の西壁試料においては連続して検出されており、桂群などの比較的乾いたところに生育していたと推測される。ウシクサ族(スキヤチガヤなど)もほぼ連続して検出されており、ネササ節などとともに稻作地周辺に生育していたのである。一方、クマザサ属などについては、遺跡周辺の森林の下草としての存在が考えられる。花粉分析結果をみると、ツガ属やマツ属複雑管束亞属(アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類)などの針葉樹林や、コナラ亞属を中心とした落葉広葉樹林が遺跡周辺に成立していたとみられる。クマザサ属などはこれら森林の下草として生育しており、そうした生育地よりクマザサ属型のプラント・オバールが供給されたものと推測される。

#### ○引用文献

- ・藤原宏志(1976) プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)  
—数種イネ科植物の珪藻体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- ・藤原宏志(1978) プラント・オバール分析法の基礎的研究(2)  
—イネ(Oryza)属植物における擬動細胞珪酸体の形状—. 考古学と自然科学, 11, p.9-20.
- ・古環境研究所(1989) プラント・オバール. 練馬区弁天池低湿地遺跡の調査. 東京都住宅局・練馬区遺跡調査会,  
p.133-140.

### III. 東河原遺跡の花粉化石群集 吉川昌伸(パレオ・ラボ)

#### 1. 概要

山梨県東河原遺跡は、甲府市北部の荒川右岸の扇状地に位置する。遺跡の堆積層は、扇状地性の砂を主体とすることから、堆積物の粒度的には花粉分析に不適な試料と考えられる。しかし、本遺跡ではA区でⅠ～Ⅲ面、B区でⅠ～Ⅲ面の計6面の水田址と考えられる歴史遺構が確認されている。つまり、水田という特殊な環境であることから堆積物が粗粒でも花粉化石が含まれている可能性が期待された。こうしたことから分析を行った結果、多くの試料から花粉化石が得られた。ここでは、これら結果に基づき周辺の植生や堆積環境について検討を行ったので以下に示す。

花粉化石群集の検討は、A区西壁、B区西壁、B区南壁の3地点で行った。分析地点のセクション図及び各地点の地質柱状図と分析試料採取層準については第Ⅰ章に示してあることから参照されたい。処理は、試料約3～20gを10%KOH(沸騰約15分)一傾斜法により砂を除去～48%HF(約30分)～重液分離(比重2.1)～アセトトリル処理の順に行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッヂミキサーで十分攪拌後マイクロビットで取りグリセリンで封入した。

同定は、部分的計画による花粉組成の歪を無くため、プレパラートの全面を行った。この間に出現した花粉化石のリスト(第19～21図)と主要花粉分布図を示す(第22～24図)。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本・胞子は總花粉胞子数を基数として百分率で算出した。なお、図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。また、樹木と草本があるクワ科、バラ科、マメ科の分類群は現時点では区別が出来ないため暫定的に草本花粉に含めてある。図版に示したPAL.MY番号は、単体標本の番号を示す。これら標本はパレオ・ラボに保管してある。

#### 2. 各地点の花粉化石群集の記載

##### A区西壁地点

A区西壁地点では、6層準で花粉化石の検討を行った。このうち、水田址の床土とされるNo.15とNo.20aを除く4層準で樹木花粉が比較的多く産出した。なお、No.15とNo.20aでは花粉が産出しないわけではなく、樹木花粉数は少ないがイネ科は比較的多く産出している。

樹木花粉の出現傾向は、3つに区分される。すなわち、No.20aとNo.11・12及びNo.7である。下部のNo.20aでは、針葉樹のツガ属が44%と高率に出現し、落葉広葉樹のコナラ亞属やマツ属複雑管束亞属を作り。No.11・12では、マツ属複雑管束亞属が高率に出現し、コナラ亞属を比較的高率に伴う。また、スギが増加傾向にある。上部のNo.7ではマツ属はいくぶん減少し、逆にスギが37%と高率に出現する。他にコナラ亞属が比較的高率に出現する。一方、草本花粉では全般にイネ科が高率に出現し、水生植物

のキカシグサ属を伴う。イネ科花粉の大半はイネ属型からなる。他に栽培に関する植物としてはソバ属やアブラナ科などがあげられる。ソバ属は低率ながら多くの試料から産出し、アブラナ科は上部の11や7で比較的高率に出現する。また、最下部の20b試料からはワタ属の花粉が1個体産出している。

#### ④B区西壁地点

B区西壁地点では、8層準で花粉化石の検討を行った。しかし、上部と最下部で比較的多くの花粉が得られたが、第Ⅱ面を含む中部では産出した花粉は少ない。特にNo.4では全体で26個と極めて少ない。

樹木花粉の出現傾向は、大きくは2つに区分される。すなわち、最下部のNo.7bでは落葉広葉樹のコナラ亜属が39%と高率に出現し、ツガ属やカバノキ属、クリ属及び常緑広葉樹のアカガシ亜属を伴う。上部のNo.1~3では、マツ属複数管束東亜属が増加し、No.1では54%を占める。一方、コナラ亜属は比較的高率に出現するが、減少傾向にある。他にツガ属が10%前後で出現する。一方、花粉の少ないNo.6や7aでは相対的にツガ属の量が多いようである。草本花粉では、最下部のNo.7bではイネ科が19%と少ないが、上部では45~62%と高率に出現する。このイネ科花粉の大半はイネ属型からなる。他に水生植物のキカシグサ属、オモダカ属、ミズアオイ属が産出し、最下部ではカヤツリグサ科が比較的多い。また、ソバ属やアブラナ科も低率ながら出現する。

#### ⑤B区南壁地点

B区南壁地点では、8層準で分析を行いNo.9aを除く試料から比較的多くの花粉化石が産出した。

樹木花粉の出現傾向は、大きくは3つに区分される。つまり、下部のNo.7~9bでは針葉樹のツガ属、マツ属複数管束東亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属が比較的高率に出現し、常緑広葉樹のアカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属を伴う。中部のNo.12b~5ではツガ属やマツ属などの針葉樹が高率に出現し、コナラ亜属が低率になる。上部では、ツガ属は低率になり、コナラ亜属やマツ属が高率に出現する。一方、草本花粉では、最下部のNo.9bと中部のNo.3を除いてはイネ科が高率に出現し、ミズアオイ属やキカシグサ属などの水生植物を低率ながら伴う。このイネ科花粉は他地点と同様に大半はイネ属型からなる。また、ソバ属が全試料から出現し、ワタ属が5%から僅かに産出している。

#### 3. 花粉化石群集からみた若干の考察

東河原遺跡では、A、B区で各3面の水田址と考えられる遺構が確認されている。各遺構からは古墳時代から近世までの遺物が出土しているが、最下部の第Ⅲ面からも近世の遺物が出土することから、すべて近世以降の堆積層とみなせる。ここでは、A、B区の各遺構面が各々概ね同一の時期とみなして2地点間の比較検討を行った。

まず、B区の西壁と南壁は遺構面からすると概ね同時期の堆積層といえるが、花粉組成に違いが認められる。つまり、南壁ではツガ属が比較的高率ないし高率に出現する。ツガ属は、シダ植物胞子が多くイネ科が低率な層準で最も高率に出現する。また、南壁は他地点に比べトウヒ属やカラマツ属などの耐寒帶性要素が多い。なお、西壁でもNo.6や7aなどの花粉の少ない層準でツガ属花粉が目だつ。一方、珪藻化石では南壁は河川の影響を頻繁に受け不安定な環境が示されている。したがって、ツガ属花粉は河川の影響をより強く受けた地点で多いようである。こうしたことから、ツガ属は周辺の主要な森林構成要素ではなくむしろより上流部に主に分布していたと推定される。なお、3地点を層位的に比較検討した結果、ツガ属は特に第Ⅱ面床土の層準で多産するようである。

3地点を遺構面を基に比較検討した結果、近世以降の森林植生は3つの時期に区分される。すなわち、下位よりナラ類を中心とする落葉広葉樹林、マツ林、スギ林の各種生长期である。ナラ類を中心とする落葉広葉樹林期(B区西壁7b)には、遺跡の周辺ないし後背山地などには落葉広葉樹のナラ類を中心とし、クリ属やカエデ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、クマシデ属-アサダ属、ツサザクラ属、及び常緑樹のアカガシ亜属、針葉樹のニヨウマツ亜属などからなる森林が形成されていた。また、山地の渓谷斜面などにはツガ属やモミ属の林分もあったであろう。マツ林期( B区西壁No.1~3、A区西壁No.11~12)では、ナラ類などが急減し、逆にニヨウマツ亜属が急増し多産する。しかし、樹木花粉の比率が低いことから、周辺の森林植生はかなり疎林になつたと推定される。なお、関東地方におけるニヨウマツ亜属の増加は、14~15世紀以降に漸増し富士宝永スコリア下降(西暦1707年)頃から多産する(辻、1984)。スギ林期は、A区西壁の最上部の旧耕作土の7aのみで認められた。スギは、A区の11層準以降で急増し、下位の層準では稀である。したがって、この付近におけるスギの増加はニヨウマツ亜属の増加以降に認められ、スギの植林がかなり新しい時期に行われたことを示す。

一方、低地ではB区の9層を除いては水田耕作が引続き行われていたと推定される。こうした水田には、いわゆる水田雜草のオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属などの拙水植物も生育していた。また、周辺の陸上部では、ソバやワタも栽培されていたようである。ワタは、延暦18年(799年)に渡来したが栽培に失敗その後絶えてしまった。しかし、16世紀の初めに再渡来して三河でワタ作がおこり、その後各地に広がった(足田、1976)。甲斐では、16世紀にすでにワタ作が行われていたようである。一方、A区の第1面より上位ではアブラナ科が比較的高率に出現することから、アブラナ科の植物を栽培していた可能性は高い。

#### ○引用文献

- ・辻 誠一郎(1984) 関東地方におけるマツ林繁栄の時代とその背景。 日本国立生態学会大会講演要旨集。 31, p.47
- ・足田 輝一(1976) 週刊朝日百科「世界の植物」。 34, p.816-819







以下では、各地点から検出された珪藻化石種の特徴を示し、その珪藻化石群が指標する環境(生育地)について述べる。珪藻化石の環境指標種群は安藤(1990)に従い、指標種群以外の珪藻種は広布種として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明とした。

#### [B区西壁]

珪藻化石の指標種群から大きく2帶に区分される。I带(No.7a)は、中～下流性河川指標種群の主要構成種の*Cymbella turgidula*が約42%と高率で出現し、同種群に属する*Cymbella minuta*も出現し、全体として約47%を占める。また沼沢湿地付着生種群も全体として約11%程度隨伴する。このことから、中～下流域の河川環境が優勢で、沼沢湿地環境も付随したものと推定される。

II带(No.1～5)では、沼沢湿地付着生種群の主要構成種の*Pinnularia viridis*や*Neidium iridis*が出現し、全体として約22～37%と高率で出現している。一方、I带で出現した中～下流性河川指標種群は低率ながら約6～13%隨伴する。このことから、河川のように流水のある環境から、沼沢湿地環境に変化したことが推定される。

#### [B区南壁]

珪藻化石の指標種群から大きく6帶に区分される。I带(No.9b)およびIII带(No.7,8)では、*Cymbella turgidula*や*Cymbella minuta*などの中～下流性河川指標種群が高率で出現し、沼沢湿地付着生指標種群より優勢である。一方、II带(No.9a)やIV带(No.5)あるいはIV带(No.2a)では、沼沢湿地付着生指標種群が中～下流性河川指標種群より優勢である。また、V带(No.2b,3)では、両者の指標種群がほぼ同程度に出現している。このことから、中～下流域の河川環境と沼沢湿地が交互に成立するやや不安定な環境が推定される。

#### [A区西壁]

概ね、沼沢湿地付着生指標種群が優占し、*Pinnularia viridis*などが比較的高率で出現する。このことから、比較的安定した沼沢湿地環境が継続、成立したものと推定される。

B区西壁No.1と同南壁No.2bおよびB区西壁No.7bと同南壁No.5は、調査により同一層位であることが確認されるが、両者の環境は必ずしも一致しない。B区南壁では流水の影響を受けやすい場所であった可能性は高い。大半の堆積物からはイネのプラント・オバールが多く検出され、稻作の可能性が示されているが、ここで示された沼沢湿地付着生指標種群に属する珪藻種は、水深が1m内外で一面に植物が繁殖しているところ、あるいは湿地で生育する種である(安藤,1990)。

#### ○引用文献

- ・安藤一男(1990): 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理. p73-88.
- ・小杉正人(1988): 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究. p1-20.

## 第5章 まとめ

本遺跡では第Ⅲ章で詳述したようにA区・B区とともに各3面の水田面が検出されており、各面はその形態の類似性などからA区・B区に共通する関係となることが確認されている。調査中には各面の細かい時期の把握が可能のように、各道構面に伴う遺物の認定に努めた。しかし、結果的には各水田面からの出土遺物は年代幅が広く、大きな内容変化もないため、各面の細かい時期区分にはつながらないことが判明した。ただし、最も古い第Ⅲ面からは出土した最新の遺物は近世(江戸幕末期)の遺物であり、その上層の第Ⅱ面から出土した最新の遺物には明治期の遺物が含まれる(B区のみで確認)ことから、この二者間に僅かではあるが時間差を見い出すことも可能である。しかし、水田址という道構の性格や氾濫多発の荒川の近接地という立地環境を要因とする遺物混入を考えるならば、共伴遺物の時間差を即ち採業期の差とみなすことはできない。この点については、今後の周辺地域での調査事例の検証や水田形態変遷の研究を併せ見ながらこの問題の答えを模索していく以外に方法はない。よって、東河原遺跡の水田址の時期については、以下の3点を挙げるに留めざるを得ない。

1. 第Ⅲ面水田址(A・B区)は少なくとも近世(江戸幕末期)あるいはそれ以降の耕作利用が推測される。
2. 第Ⅱ面水田址(A・B区)は明治期あるいはそれ以降に耕作利用された可能性がある。
3. 第Ⅰ面水田址(A・B区)は第Ⅱ面水田址の廃施後に耕作利用され、両者の形態や配置の類似性から時間差が極めて短いことが推測される。

また、今回の調査ではあまり類似性のない「平行する等間隔の歯」を伴う水田址が第Ⅰ面・第Ⅱ面から検出されるなど、近世以前の水田の諸形態を検出することができた。これらについての細かい検討はこの場ではできないが、近世水田址の研究上有効な資料となることであろう。さらに道構等の確認はされなかったものの、周辺地に古墳時代・平安時代・中世の遺跡が遺存している可能性を出土遺物から推測することができ、今後の池田地区あるいは甲府市西部の歴史究明への一つの足掛かりになるものと考えられる。

紙数の都合もあり十分な遺跡の解釈もできない「まとめ」となったが、この調査結果の公表(報告書の刊行)を機会に多くの方々の研究素材となり、この遺跡の様々な解釈がなされることを大いに期待したい。また同時に、調査担当者として東河原遺跡を調査研究していく出発点にしたいとも考えつつ、一旦筆をおくことにする。

### ○引用・参考文献

- 群馬県教育委員会 1982 「日高遺跡」一関越自動車道(新潟線)地域一 理藏文化財調査報告書第5集  
仙台市教育委員会 1991 「富沢遺跡」-第35次発掘調査報告書-仙台市文化財調査報告書150集  
工業普通 1990 「水田の考古学」 東京大学出版会  
社団法人 農山漁村文化協会 1983 「農業園芸」 日本農書全集26  
社団法人 農山漁村文化協会 1990 「緑圃要務」 日本農書全集15  
池田地誌編集委員会 1982 「池田地誌」  
山梨県企画管理局 1984 「甲府」-土地分類基本調査-  
甲府市役所 1994 「甲府市誌」通史編第2巻近世  
竹内里三編 1984 「角川地名大辞典」「19 山梨県」

### ◆ 2点の図絵について ◆

挿図の絵は、当時の生活を記録として留めている資料のなかで、特に本遺跡で検出された事例と関連性が伺える2点の図絵を、土屋又三郎著『農業園芸』より許可を得て掲載したものです。

表紙の図絵は、右上に「畔稗・田稗刈」とあるように畔に植えた稗を刈り取る状況を描写したものです。畔に稗を植えるのは、畔の保護や害虫から稗を守る役割があったとされています。

東河原遺跡でも稗以外の様々な草木の花粉化石が検出されており、稗の他にも栽培がなされていた可能性が考えられます。

P.3の図絵は、右上に「木綿種蒔」とあるように綿の種子を蒔いている状況を描いたものです。綿は、商品作物として近世で飛躍的に栽培がなされるようになりました。その背景には、商品作物としての流通と衣類材料、自給用の作物として多く栽培されていました。

本遺跡からも微量であるが、綿の花粉化石が土壤中から検出され、綿栽培が行なわれていたと考えられます。



写真26

調査地点遠景(東南東より)

調査地点は中央の建物

(県立看護短期大学)

手前は写真右から左に流れる荒川

奥は南アルプス鳳凰三山



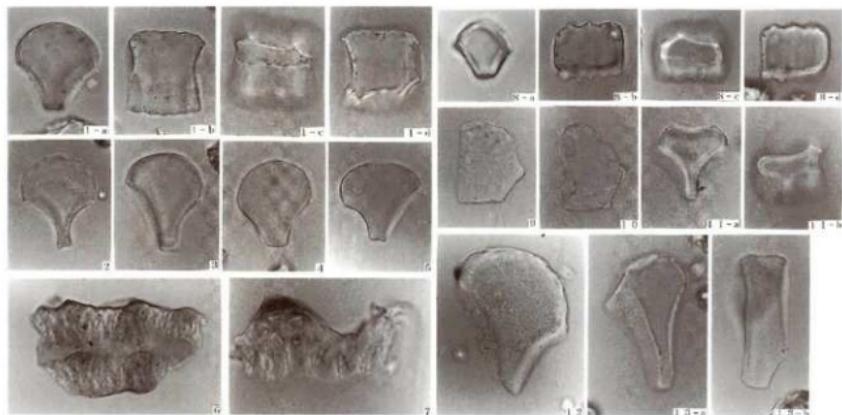
写真25 A区調査風景



写真24 台風通過により水没した調査B区

## ■報告書抄録

ふりがな	ひがしかわらいせき				
書名	東河原遺跡				
副書名	山梨県立看護短期大学建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告				
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書				
シリーズ番号	第95集				
編著者名	森原明廣・宮里学				
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター				
所在地	〒400-15 山梨県埋蔵文化財埋蔵文化財センター TEL 0552-66-3016				
発行年月日	1994年3月29日				
所収遺跡	所在地	位置・地図名	調査機関	調査面積	調査原因
東河原	山梨県甲府市 池田1丁目	25,000の1 甲府北部 北緯35°40'06" 東経138°33'56" 標高 280m	19940527 19940902	950m <sup>2</sup> × 3面 2,850m <sup>2</sup>	県立 看護 短期大学建設
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	水田跡	近世以降	水田6面 畦畔	土師器・陶磁器 銭貨・煙管	自然科学分析(土壤)



第31図 プラント・オパール写真 30nm

1:イネ(1-a:表面、1-b:側面、1-c:裏面、1-d:裏面) 試料11  
 2-5:イネ(裏面) 2:試料2b 3:試料1 4:試料2a 5:試料8  
 6-7:イネの殻? (一部) 6:試料7a 7:試料7b

第32図 プラント・オパール写真 30nm

8:ネギサ葉型(8-a:表面、8-b:側面、8-c:裏面、8-d:裏面) 試料20  
 9-10:クマツナ葉型(表面) 9:試料7b 10:試料2a  
 11:シバ葉(11-a:表面、11-b:裏面) 試料1  
 12:ヨシ葉(断面) 試料11  
 13:ウシケナズチ(13-a:表面、13-b:裏面) 試料43

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第95集

## 東河原遺跡

発行 山梨県教育委員会  
 山梨県厚生部  
 印刷日 平成6年3月25日  
 発行日 平成6年3月29日  
 印刷所 株式会社嶺南堂印刷所